



多可町中区奥中

奥中・三内遺跡（おくなか　みうちいせき）

多可町八千代区中野間

極楽寺遺跡Ⅱ（ごくらくじいせき）

多可町加美区豊部

豊部・森内谷遺跡（とよべ　もりうちだにいせき）

多可町加美区奥豊部

奥豊部古墳群（おくとよべこふんぐん）

兵庫県多可郡多可町教育委員会
2014年３月

多可町文化財報告22　奥中・三内遺跡　極楽寺遺跡Ⅱ　豊部・森内谷遺跡　奥豊部古墳群

多可町教育委員会

多可町中区奥中

奥中・三内遺跡（おくなか　みうちいせき）

多可町八千代区中野間

極楽寺遺跡Ⅱ（ごくらくじいせき）

多可町加美区豊部

豊部・森内谷遺跡（とよべ　もりうちだにいせき）

多可町加美区奥豊部

奥豊部古墳群（おくとよべこふんぐん）

兵庫県多可郡多可町教育委員会

２０１４年3月

序　　文

本報告書は、1988 年に奥中地区圃場整備事業により調査された奥中・三内遺跡、2011 年に調査された極楽寺遺跡、2012 年に調査された豊部・森内谷遺跡と奥豊部古墳群の調査成果を報告しています。

いずれの遺跡も確認調査を基本としているため、調査範囲は狭小ですが、これらの新しい調査成果は、多可町の歴史だけでなく、周辺地域の歴史を組み直すことのできる資料になるものと期待されています。本書をはじめ、出土した資料が広く活用されることを期してやみません。

最後になりましたが、発掘調査及び整理調査にご協力いただきました、関係各位に厚く謝意を表す次第です。

2014 年３月

多可町教育委員会
教育長　岸　原　　章

例　　言

1　本書は兵庫県多可郡多可町中区奥中に所在する奥中・三内遺跡、八千代区中野間所在の極楽寺遺跡、加美区豊部所在の豊部・森内谷遺跡、加美区奥豊部所在の奥豊部古墳群の発掘調査報告書である。

2　調査は多可町教育委員会（一部旧中町教育委員会）が主体となり、宮原文隆、安平勝利が担当した。

3　発掘調査・整理作業・本報告書刊行は、文化庁の国庫補助金及び兵庫県教育委員会の県費補助金により実施した。

4　遺跡での遺構写真及び遺物写真は調査担当者が撮影した。

5　現地での個々の遺構等の実測は藤浦　薫・藤原　敏・松田優子・宮原・安平が行った。

6　遺物実測は早崎喜代美・松田・宮原・安平、遺物の拓本は安平千恵美、トレースは吉田衣里・早崎が行った。

7　方位は、極楽寺遺跡及び奥豊部遺跡は座標北（世界測地系）、他は磁北で示している。

8　本書記載の土器実測図の断面は、土師器・土師質土器等－黒、須恵器・陶器－白、施釉陶器・磁器－網目とした。また、土器実測図において中心軸に沿って内外面の成形・調整表現が上下一直線にわたって欠する土器は、遺存率及び歪み等のため復元径に問題があることを示している。また、土師器小皿で灯明の痕跡が確認できるものに [㊟]、須恵器で器壁に研磨痕跡を確認できるものに [研] を付した。

　なお、実測番号は、銭貨を含む金属製品には「Ｆ」、石製品には「Ｓ」、木製品には「W」をアラビア数字の前に付した。

9　遺物は番号を付し、図と写真の番号は一致する。遺物写真の縮尺については、土器個体別写真は原則としてほぼ1/3、軒瓦個別写真はほぼ1/3、そのほかの瓦の個別写真は、ほぼ1/4としている。なお、集合写真は任意の縮尺をとっている。

10　本書の執筆は宮原・安平が行い、宮原が編集した。

11　本報告に係る図面・写真・遺物等は、兵庫県多可郡多可町中区東山539-3　那珂ふれあい館にて保管している。

本　文　目　次

序　文
例　言

Ⅰ　はじめに
　1．地理的環境……1
　2．歴史的環境……2

Ⅱ　奥中・三内遺跡の調査
　1．はじめに……3
　2．調査の概要……4
　3．小結……11

Ⅲ　極楽寺遺跡の調査
　1．はじめに……12
　2．調査の概要……13
　3．出土遺物……14
　4．小結……30

Ⅳ　豊部・森内谷遺跡の調査
　1．はじめに……33
　2．調査の概要……34
　3．小結……36

Ⅴ　奥豊部古墳群の調査
　1．はじめに……41
　2．調査の概要……42
　3．小結……45

挿　図　目　次

Ⅰ　はじめに
第１図　多可町位置図

Ⅱ　奥中・三内遺跡の調査
第２図　周辺の遺跡分布図
第３図　三内地区調査位置図
第４図　三内地区Ｔ-2･3
第５図　三内地区T-28
第６図　Ｔ-28 掘立柱建物1
第７図　奥中・三内遺跡出土遺物(1)
第８図　河原谷地区調査位置図
第９図　河原谷地区T-9･10･16
第10図　北野地区調査位置図
第11図　北野地区T-18･25～27
第12図　奥中・三内遺跡出土遺物(2)
第13図　奥中・三内遺跡出土遺物(3)

Ⅲ　極楽寺遺跡の調査
第14図　周辺の遺跡分布図
第15図　極楽寺遺跡調査位置図
第16図　T-11
第17図　極楽寺遺跡出土遺物(1)
第18図　極楽寺遺跡出土遺物(2)
第19図　極楽寺遺跡出土遺物(3)
第20図　極楽寺遺跡出土遺物(4)
第21図　極楽寺遺跡出土遺物(5)
第22図　軒平瓦A2類とＡ類の模式図
第23図　極楽寺遺跡出土遺物(6)
第24図　極楽寺遺跡出土遺物(7)
第25図　極楽寺遺跡出土遺物(8)
第26図　極楽寺遺跡出土遺物(9)
第27図　極楽寺遺跡出土遺物(10)
第28図　極楽寺遺跡出土遺物(11)
第29図　極楽寺遺跡出土遺物(12)
第30図　極楽寺遺跡出土遺物(13)
第31図　極楽寺遺跡出土遺物(14)

Ⅳ　豊部・森内谷遺跡の調査
第32図　周辺の遺跡分布図
第33図　出土遺物(1)
第34図　出土遺物(2)
第35図　出土遺物(3)

Ⅴ　奥豊部古墳群の調査
第36図　周辺の遺跡分布図
第37図　トレンチ１
第38図　トレンチ２
第39図　トレンチ３
第40図　奥豊部古墳群分布図
第41図　奥豊部1号墳（平成9年度調査）

表　目　次

表１　奥中・三内遺跡遺物観察表
表２　極楽寺遺跡遺物観察表
表３　豊部・森内谷遺跡遺物観察表
報告書抄録

図　版　目　次

表　紙
裏表紙

図版表紙
図版１　奥中・三内遺跡発掘調査(1)
　調査前全景（三内地区）　Ｔ-2　Ｔ-3
図版２　奥中・三内遺跡発掘調査(2)
　Ｔ-28全景　Ｔ-28　掘立柱建物1
図版３　奥中・三内遺跡発掘調査(3)
　Ｔ-9　Ｔ-10　Ｔ-16
図版４　奥中・三内遺跡発掘調査(4)
　Ｔ-18　Ｔ-26　Ｔ-27
図版５　奥中・三内遺跡出遺物(1)
図版６　奥中・三内遺跡出遺物(2)
図版７　極楽寺遺跡発掘調査(1)
図版８　極楽寺遺跡発掘調査(2)
図版９　極楽寺遺跡出土遺物(1)
図版10　極楽寺遺跡出土遺物(2)
図版11　極楽寺遺跡出土遺物(3)
図版12　極楽寺遺跡出土遺物(4)
図版13　極楽寺遺跡出土遺物(5)
図版14　極楽寺遺跡出土遺物(6)
図版15　極楽寺遺跡出土遺物(7)
図版16　極楽寺遺跡出土遺物(8)
図版17　豊部・森内谷遺跡トレンチ位置図
図版18　豊部・森内谷遺跡調査地景
図版19　豊部・森内谷遺跡T-1～T-4
図版20　豊部・森内谷遺跡T-5・T-6
図版21　豊部・森内谷遺跡T-7・T-8
図版22　豊部・森内谷遺跡T-9～T-11
図版23　豊部・森内谷遺跡T-12
図版24　豊部・森内谷遺跡T-13
図版25　豊部・森内谷遺跡T-14～T-17
図版26　豊部・森内谷遺跡T-18～T-21
図版27　豊部・森内谷遺跡T-22・T-23
図版28　豊部・森内谷遺跡出土遺物(1)
図版29　豊部・森内谷遺跡出土遺物(2)
図版30　豊部・森内谷遺跡出土遺物(3)
図版31　奥豊部古墳群調査位置図
図版32　トレンチ1（奥豊部3号墳）
図版33　トレンチ2（奥豊部4号墳）
図版34　トレンチ2（奥豊部4号墳）
図版35　トレンチ2（奥豊部4号墳）
図版36　トレンチ3（奥豊部2号墳）
図版37　トレンチ3（奥豊部2号墳）

Ⅰ　はじめに

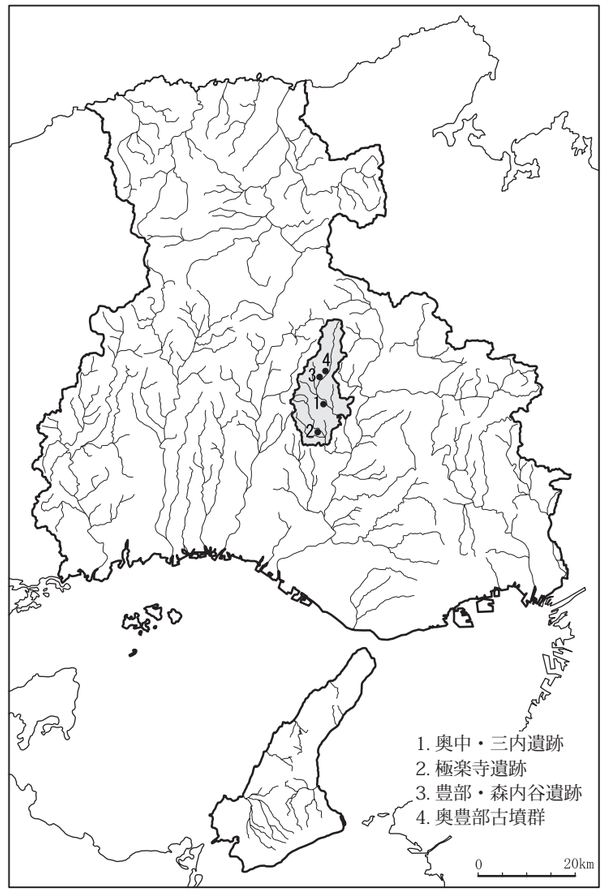
1．地理的環境

多可町は、多可郡内の中町、加美町、八千代町が合併して平成17年11月1日に誕生した新しい町である。兵庫県のほぼ中央で、北播磨地方の最北部に位置する。

多可町役場からは、南方の県庁所在地である神戸市まで直線距離で約50㎞、北方へは日本海側の海岸線（豊岡市）まで約70㎞を測る。

町は東西約13㎞、南北約25㎞を測り南北に細長く、面積は185.15㎢を保有し、平成26年1月における人口は22,719人である。

行政境は、北は朝来市・丹波市に、東は西脇市に、西は神崎郡神河町・市川町に、南は加西市に接している。



第1図　多可町位置図

全体が北高南低の地形で、北部は千ヶ峰をはじめとする標高900~1,000m級の峰から派生する山間部を加古川の支流である杉原川及び野間川が南流する。これらの河川によって、平野部は谷底平野を形成している。杉原川水系は中区・加美区、野間川水系は八千代区に該当する。気候は瀬戸内型に属するものの、冬季と夏季の気温格差がやや大きく、内陸的な様相を呈する。

主たる産業は山田錦を中心とする稲作農業、山間部の林業、播州織を中心とする繊維産業であり、地理的・歴史的環境を活かした新たな産業の導入・振興が模索されている。

杉原川中流域に位置する中区内の地理的景観を見ると、この杉原川の流れによって北部平野、

中央平野、安田平野の３つの平野部に大きく区分でき、本報告の奥中・三内遺跡は、中央平野の北部に位置する。この中区の平野部をとりまく山塊は、北には標高 692.6 ｍの妙見山がそびえ、西側では山腹が緩斜面であるのに対して、東側・南側では急斜面が続く崖を呈している。

杉原川上流域に位置する加美区は、区域の約 85％を山間部が占めており、杉原川によって形成された小規模な谷底平野が存在している。西側の山塊では、標高 1005.2 ｍの千ヶ峰から八千代区の標高 939.4 ｍの笠形山まで、南北方向に北播磨の最高峰が連なっている。本報告の豊部・森内谷遺跡及び奥豊部古墳群は、この山麓部に位置している。

野間川流域に位置する八千代区も、大和川を含めた河川によって小規模の谷底平野が形成されている。この平野部にいくつもの支谷が取りつき、麓屑面や扇状地が形成される。平野を取りまく山塊は、西側に加美区から繋がる千ヶ峰から続く笠形山の急峻な尾根が連なるが、東側では低位で比較的緩やかである。本報告の極楽寺遺跡は、野間川に面した扇状地上に位置している。

２．歴史的環境

歴史的環境については、各章ごとに概略を記している。また、町内全体の遺跡や文化財については、多可町文化財報告 1~21、中町文化財報告 1~34、加美町文化財報告 1~10、八千代町文化財調査報告書第 1~3 冊の報告書を参照して頂きたい。



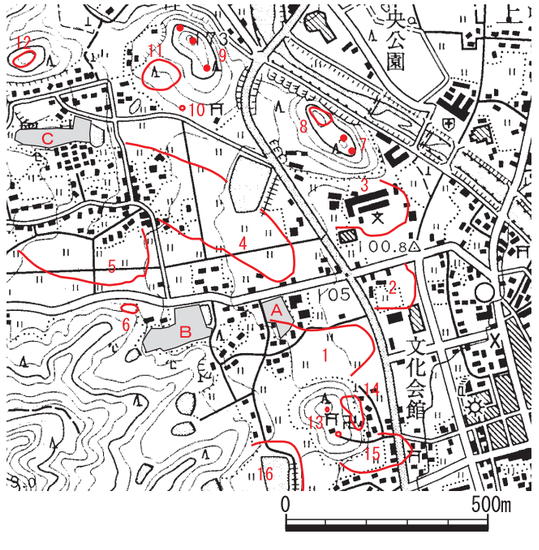
奥中・三内遺跡作業風景

Ⅱ　奥中・三内遺跡の調査

１．はじめに

1988（昭和 63）年度川西北地区圃場整備事業に先立ち、奥中地区内の埋蔵文化財発掘調査を実施した。

当地区周辺には、弥生時代後期の竪穴住居跡を含め多数の遺構が検出された奥中・三内遺跡、奈良時代～中世の各種遺構が検出された奥中･前田遺跡、奥中・桜木遺跡、軍勢遺跡の集落跡が平野部に位置し、北側には古墳時代前期末の岡山古墳群、中期の古墳と推定される新宮山古墳群、中世土器が散布する旧天神社遺跡、古墳時代中期の古墳と推定される丸山古墳群等が存在している。



第２図　周辺の遺跡分布図

１奥中・三内遺跡	２軍勢遺跡	３軍勢遺跡（中町中学校内）
４奥中・桜木遺跡	５奥中・前田遺跡	６旧天神社跡
７岡山１・２号墳	８中村構居	９新宮山古墳群
10奥中東中世墓	11新宮山遺跡	12ホウガ谷遺跡
13丸山１・２号墳	14丸山遺跡	15茂利・宮の西遺跡
16富山地池遺跡	**A三内地区**	**B河原谷地区**　**C北野地区**

【発掘調査期間】

1988（昭和63）年７月25日～８月15日

【調　査　体　制】

発掘・整理調査ともに、文化庁の国宝重要文化財等保存整備費補助事業の採択を受け、多可町教育委員会（旧中町教育委員会）が主体となり実施した。

《発掘・整理作業》　発掘・整理担当　宮原文隆

補　　助　　員　早崎喜代美、藤浦　薫、藤原　敏

整 理 技 術 員　松田優子、安平千恵美

《発掘・整理作業従事者》

赤沼史朗、岸田豊正、小東憲朗、笹倉儀三郎、橋尾久雄、松浦秀樹、真鍋秀一、吉田衣里、吉田正雄

《調査・整理作業協力者、協力機関》（敬称略）

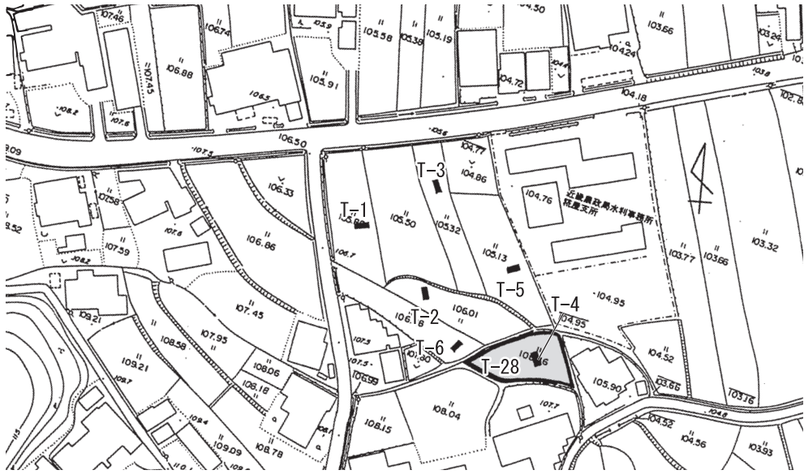
岡田章一、小川真理子、岸本一郎、立花　聡、永井信弘、西田　猛、森　幸三、森下大輔、兵庫県教育委員会文化財課、兵庫県立考古博物館、多可町（旧中町役場耕地課）

2．調査の概要

確認調査地区は三内地区、河原谷地区、北野地区の３地区に分かれており、それぞれの地区にトレンチ（約２×４ｍの規模が基本）を設定して実施した。調査の結果、遺構が検出されたのは三内地区のみであったため、今回の調査地区を奥中・三内遺跡として報告する。以下、各地区ごとに概要を記す。

1）三内地区

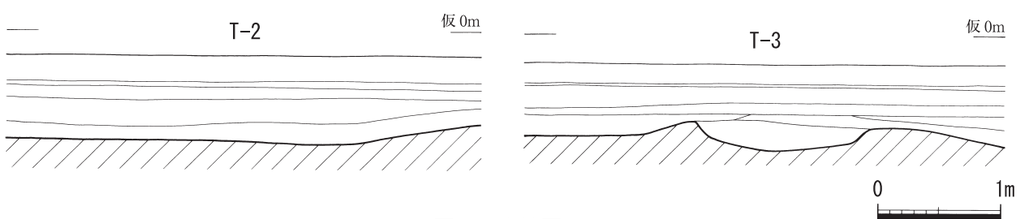
三内地区は、奥中の村内で西方から東方へ延びる台地を浸食した谷で、最も南の谷筋に位置し、谷の西方は後述する河原谷地区に繋がる。



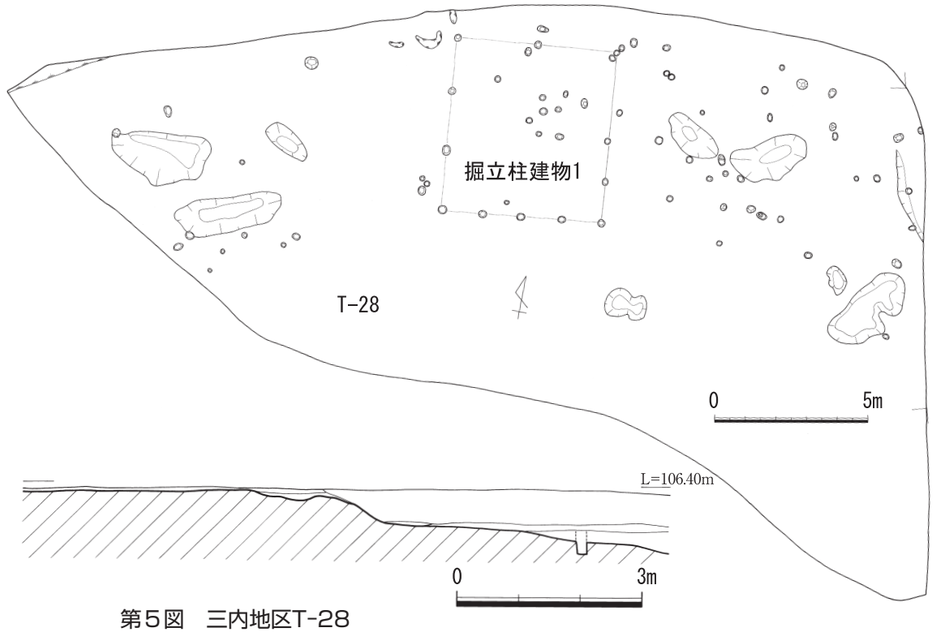
第３図　三内地区調査位置図

当地区では、T-1~6 の６ヶ所のトレンチを設定し、調査を進めた。その結果、台地の北斜面に位置する T-4 で遺構が検出され、その圃場を T-28 として本発掘調査を実施した。

T-1・3 では下層にグライ化した土壌が堆積し、T-2・5・6 では下層に黒ボク状の土壌が堆積しているが、遺構は検出されなかった。ここで図化できた土器は、T-2 出土の丹波焼甕底部(1)と T-6 出土の須恵器坏(2)である。



第４図　三内地区T-2・3

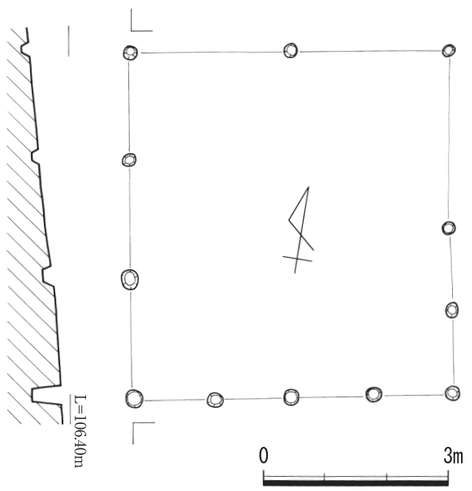


第５図　三内地区T-28

本発掘調査区 T-28 は、地山が調査区南端から緩やかな勾配をもって北側に下がっており、この部分に圃場形成のための整地が為されている。この整地層の下部には、黒ボク状の土壌が堆積している。調査区内では柱穴群と風倒木跡とみられる土坑が検出された。地形の傾斜のあり方から、柱穴は黒ボク上面から形成されていたものと推定されるが、黒ボク上面では検出することができなかった。

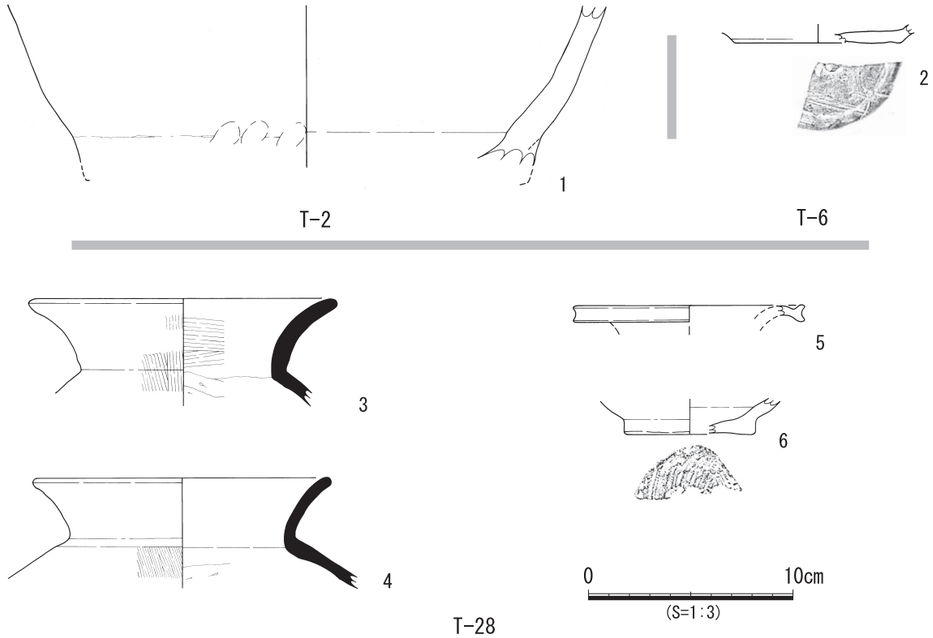
掘立柱建物１は２×３間（5.4 × 5.6m）で、南柱間が半間ごとに配置され、東柱間はあまり明確でない。建物を構成する柱穴は径 20~30cm、深さ 15~50cm を測り、内部には黒粘質土が堆積している。柱穴内からは、７世紀代と推定される土器細片が少量出土しているが、図化できなかった。

風倒木跡と推定される土坑群は、大小含め７基以上検出されている。調査区内全体からの出土遺物では、古墳時代の土師器甕(3･4)、



第６図　T-28　掘立柱建物1

須恵器壷口縁部(5)、須恵器山茶碗(6)が図化できた。

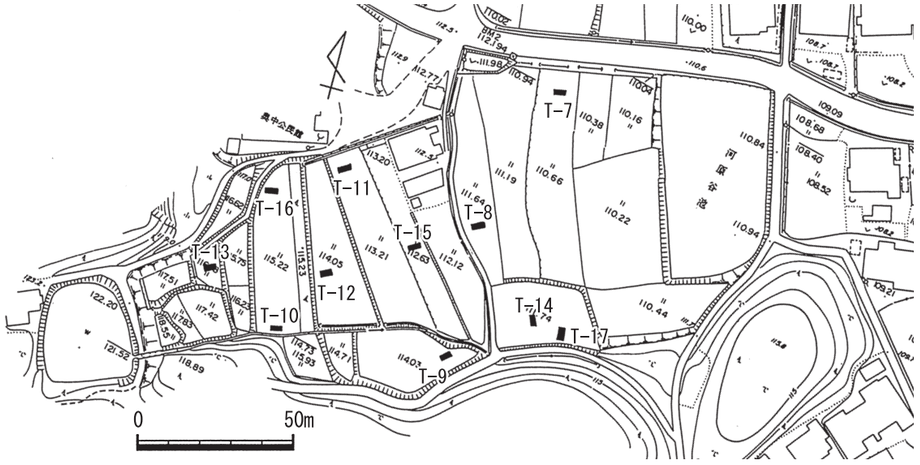


第７図　奥中・三内遺跡出土遺物(1)

２）河原谷地区

河原谷地区は、奥中の村内で西方から東方へ延びる台地を浸食した谷で、最も南の谷筋の先端部に位置し、東方は前述した三内地区に繋がる。

当地区では、T-7~17 の 11 ヶ所のトレンチを設定し、調査を進めた。調査の結果、明確な遺構は検出できなかった。



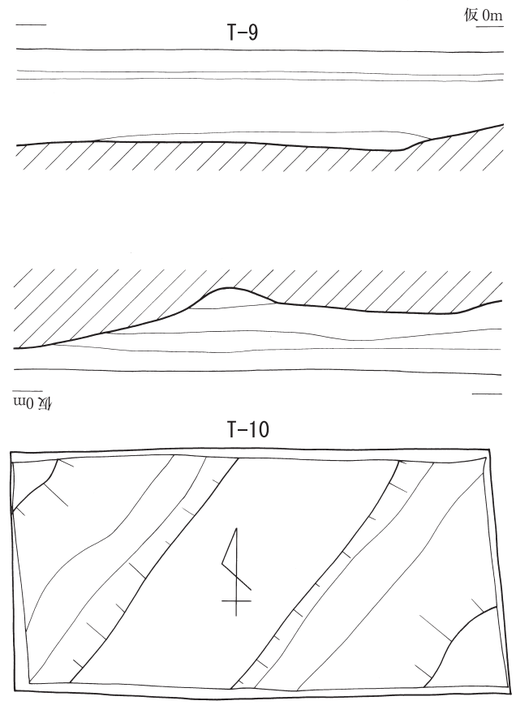
第８図　河原谷地区調査位置図

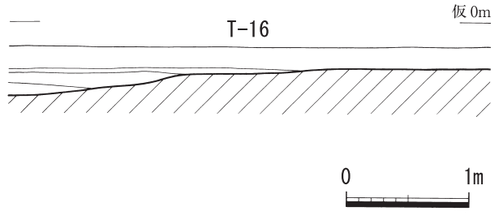
T-14・16・17 では台地から谷部への緩傾斜地の状況を呈し、これらのトレンチ内では地山の高低差が 40~70cm 存在する。

他のトレンチは谷筋内に位置しているが、必ずしも堆積層が厚いわけでなく、圃場形成時の削平や盛り土によって、現表土面から地山面までの深さには 20~95cm の差異が看取できる。T-8・9・13 では 20~50cm の盛り土層が存在する。

T-10 では、谷底部の自然流路を検出した。この最下層には、自然遺物が堆積していた。

当地区内では、奈良時代～中世にかけての遺物(7~17・S1)が出土しているが、特に注目されるのが T-11・13 で出土している古代の平瓦（10~12）である。これらの平瓦凸面には、一辺が 5~6 ㎜の細かい格子叩きが密に施されている。これと同様の格子叩きを有する平瓦は、多哥寺遺跡[1)] で確認されており、平瓦Ｂ類に相当する。また、凸面の広端部には、面取りの篦削りが施されているのが特徴でもある。なお、(12)は端面と側面の角度が大きく開いているため、道具瓦の可能性もある。





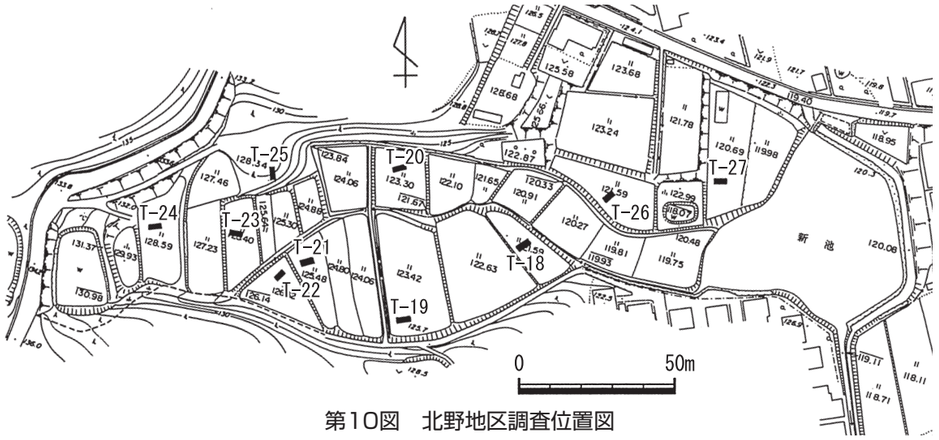
第９図　河原谷地区T-9・10・16

現在残されている「河原谷」という小字名は、こうした瓦が出土することから、瓦が出土する谷の名「瓦谷」が変容した可能性もある。いずれにしても一定量の古代瓦の出土は、周辺での瓦葺き建物若しくは瓦窯等の生産跡の存在を暗示しているであろう。砥石(S1)は粘板岩製で、表裏ともに使用痕の細かい条線が看取できる。

３）北野地区

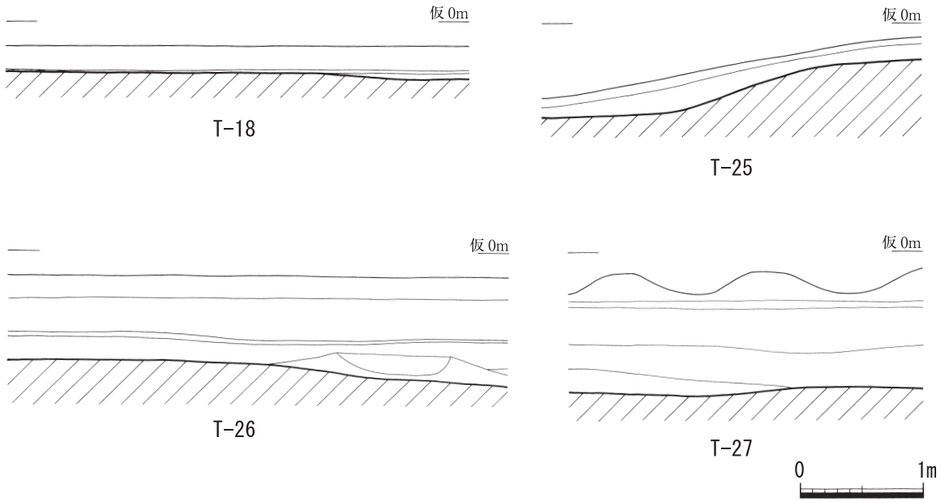
北野地区は、奥中の村内で西方から東方へ延びる台地を浸食した谷で、最も北の谷筋の先端部に位置する。

当地区では、T-18~27 の 10 ヶ所のトレンチを設定し、調査を進めた。調査の結果、明確な遺構は検出できなかった。



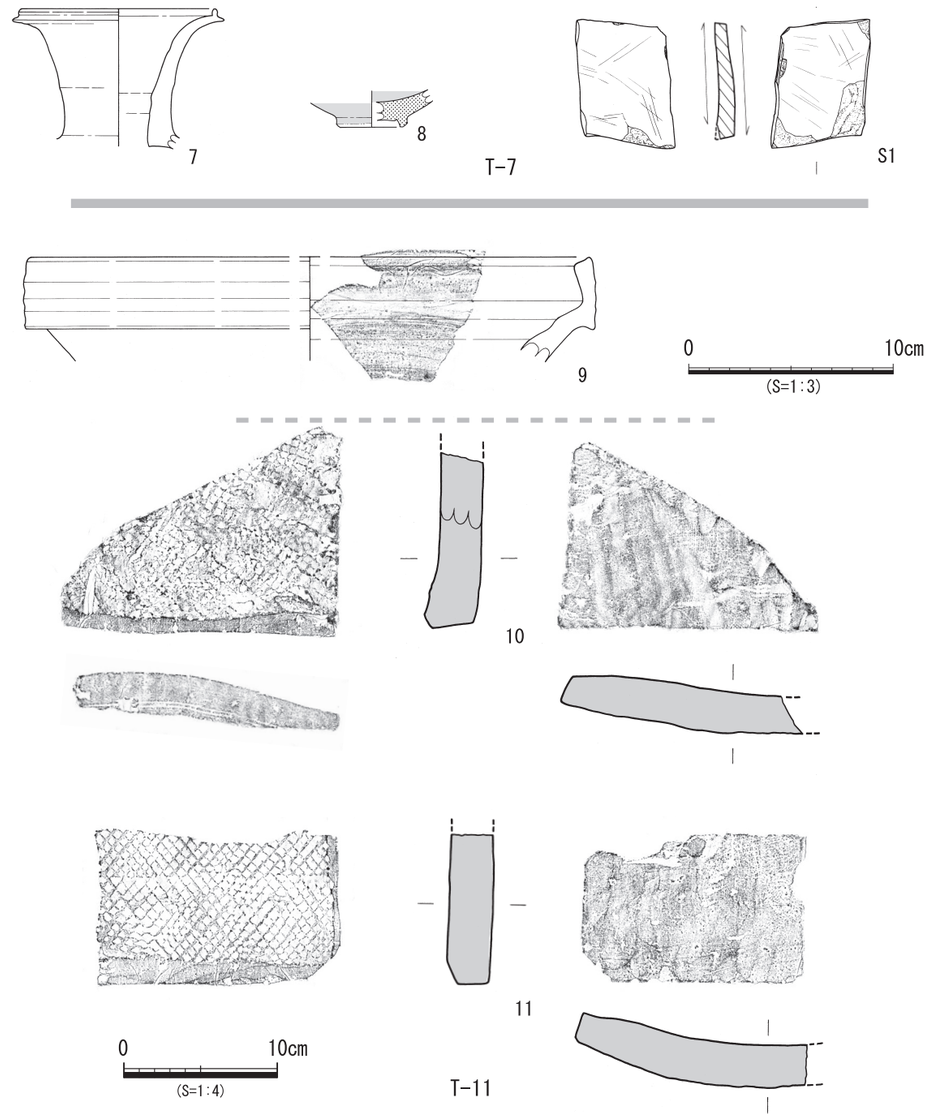
第10図　北野地区調査位置図

T-18・19・21 では台地から谷部への緩傾斜地の削平がなされ、耕土・床土の直下で地山が検出できる。水田化されていない T-25 は、ピート層下に 10~20cm にぶい黄色土の山土が確認できる。他のトレンチは谷筋内に設置しており、地山面まで 50~140cm 以上の深さを有している。

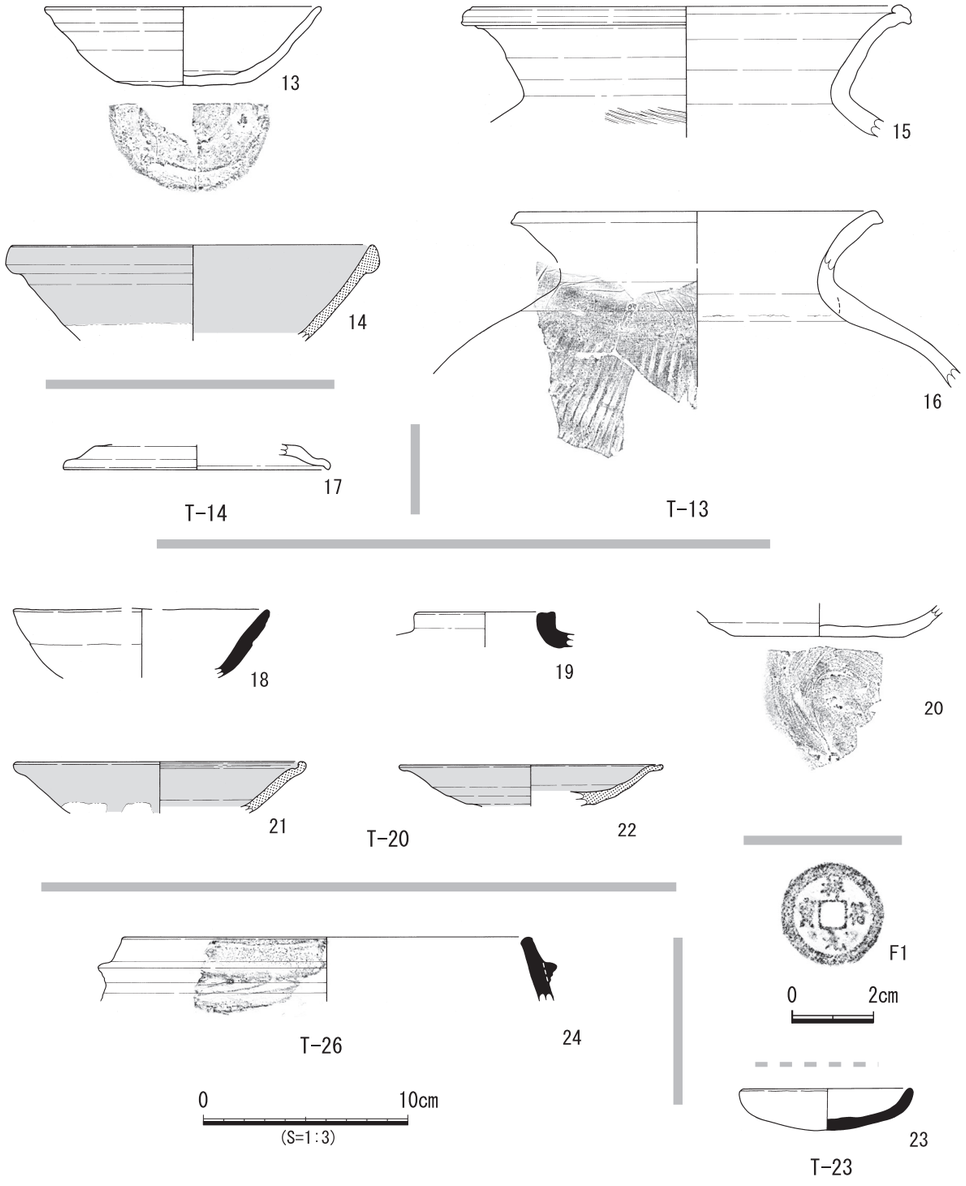


第11図　北野地区T-18・25~27

当地区内では、中世～近世を中心とする遺物(18~24・F1)が出土している。(21･22)は、肥前系陶器の溝縁皿で 17 世紀前半の所産である。(F1)は「祥符元寶」(初鋳 1008 年) である。



第12図　奥中・三内遺跡出土遺物(2)



第13図　奥中・三内遺跡出土遺物(3)

3．小　結

今回の調査対象地区で、遺構が確認されたのは三内地区のみである。調査した三内地区の南東200m の圃場では、1985（昭和 60）年度の圃場整備にかかる調査によって弥生時代後期の竪穴住居跡のほか、中世までの遺構が多数検出された奥中・三内遺跡が位置している。今回の三内地区で確認された遺構は、これに包摂される遺構群と考えておきたい。

河原谷地区、北野地区は台地を解析した谷筋に位置していることから、遺構は検出されなかったため遺跡は存在していないものと推定される。しかしながら、河原谷地区における古代瓦の出土は、注視されるべきであろう。

註
1）『多哥寺遺跡』中町文化財調査報告 9　中町教育委員会 1995

表 1　奥中・三内遺跡　遺物観察表

- 法量は（　）現存高、－は不明である。
- 成形・調整等の（　／　）は（本数／㎜）である。
- 調整の「手なで」は、手持ちのなでを示す。

遺物番号	実測番号	調査区	器種		法量（cm）			色調	成形・調整等		備考
			種類	器種	口径	器高	底・脚径		外面	内面	
1	1	T-2	丹波焼	甕	－	(7.8)	－	浅黄橙	体部横なで、底側面指頭圧痕	横なで	
2	2	T-6	須恵器	坏	－	(0.9)	8.0	灰	底部篦切り	ロクロナデ	
3	25	T-28	土師器	甕	15.0	(5.2)	－	にぶい黄橙	口縁部横なで、頸部刷毛(5/10)	頸部刷毛(5/10)、体部篦削り	
4	26		〃	〃	14.5	(5.3)	－	浅黄	口縁部横なで、体部刷毛(8/10)	体部篦削り	
5	24		須恵器	壷	11.2	(0.8)	－	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	内面緑灰色釉溶着
6	23		〃	山茶碗	－	(1.7)	6.4	灰	体部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	ロクロ回転時計回り
7	5	T-7	〃	壷	10.2	(6.7)	－	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	
8	4		青磁	小碗	－	(1.8)	3.4	(胎)灰白	－	－	底部内面露胎
S1	3		石製品	砥石	全長6.2cm、最大幅0.7cm、粘板岩製						
9	6	T-11	備前焼	すり鉢	－	(5.0)	－	外-灰、内-浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	
10	8		瓦	平瓦	－	－	－	灰	凹面-布目後一部なで	凸面-格子叩き	
11	7		〃	〃	－	－	－	灰	凹面-布目後一部篦削り	凸面-格子叩き	
12	12	T-13	〃	道具瓦	－	－	－	灰	凹面-布目	凸面-格子叩き	
13	11		須恵器	坏	13.4	(3.9)	6.6	灰	口縁部ロクロナデ、底部篦切り	ロクロナデ	
14	10		白磁	碗	17.8	(4.6)	－	(胎)灰白	－	－	
15	9		須恵器	甕	21.4	(6.3)	－	灰	口縁部ロクロナデ、体部平行叩き(2.5/10)	体部なで	
16	13		〃	甕	18.2	(8.5)	－	灰	口縁部ロクロナデ、体部平行叩き(2/10)	体部なで	
17	14	T-14	〃	蓋	13.0	(1.2)	－	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
18	18	T-20	土師器	皿	－	(3.3)	－	灰黄	口縁部手なで、体部未調整	手なで	
19	19		〃	壷	6.8	(1.7)	－	にぶい黄褐	横なで	横なで	
20	16		須恵器	山茶碗	－	(1.6)	－	灰	体部ロクロナデ、底部回転糸切り	底部仕上げなで	ロクロ回転時計回り
21	15		陶器	皿	14.2	(2.5)	－	(胎)暗褐、(釉)白	ロクロナデ	ロクロナデ	
22	17		〃	皿	12.8	(2.0)	－	(胎)灰黄、(釉)灰黄	ロクロナデ	ロクロナデ	
F1	20	T-23	銭貨	銅銭	径2.5cm			－	祥符元寶（初鋳1008年、北宋銭）		保存未処理
23	21		土師器	小皿	8.3	2.0	－	浅黄	未調整	手なで	
24	22	T-26	〃	土釜	20.0	(3.1)	－	にぶい黄橙	口縁部横なで、体部平行叩き(3/10)	横なで	

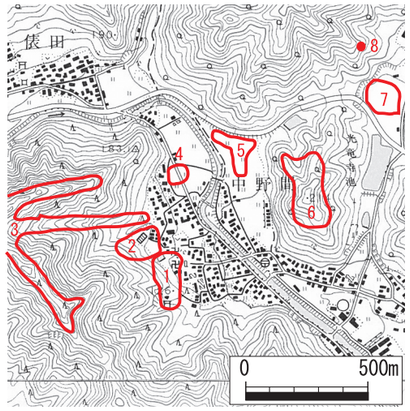
Ⅲ　極楽寺遺跡の調査

1．はじめに

八千代区中野間に位置する極楽寺は、白雉年中に法道仙人による開基と伝えられる古刹である。宗派は天台宗、山号は伊勢和山と号する。

この極楽寺の周辺の遺跡を確認すると、隣接する北側には中世墓を含む極楽寺遺跡北群、西側の山頂には野間山城跡、野間川を挟んだ対岸の独立丘陵には光竜寺山城跡、中世集落跡の存在が確認された中野間・山口遺跡、土製経筒が発見された山口経塚等の中世を中心とする遺跡が存在している。

さて、この極楽寺において明治期に焼失した本堂を再建する計画が策定され、2008 年（平成 20）に旧本堂跡（観音堂）及び北側現駐車場にトレンチによる確認調査（第 16 図 T1~10）を実施した。



第14図　周辺の遺跡分布図

1 極楽寺遺跡　2 極楽寺遺跡北群　3 野間山城跡
4 中野間・岡崎遺跡　5 中野間・山口遺跡　6 光竜寺山城跡
7 光竜寺池北遺跡　8 山口経塚

確認調査の結果、旧本堂部分については、平安時代後期と室町時代前半の遺構面を確認し、この地に寺院と考えられる建物が存在していたことが判明した。特に平安時代後期には掘立柱建物であったものが、室町時代には瓦葺き礎石建物となっている。一方駐車場部分の T-1 調査区では谷地形を埋め立てた状況を示し、瓦を堆積土に含むものの、遺構は存在しないと判断された。こうして当該地は、極楽寺遺跡として周知された[1)]。

こうした確認調査の成果を元に、極楽寺と保存協議を行った結果、多くの遺物・遺構が確認された旧本堂跡を避け、遺構がみられない駐車場地区に新本堂を建設することとなった。しかしながら、旧本堂敷地から駐車場への傾斜地部分の一部を削平せざる得なくなったため、その部分について T-11 調査区として調査を実施した。

【発掘調査期間】

2011（平成 23）年 4 月 6 日～4 月 9 日

【調 査 体 制】

発掘・整理調査ともに、文化庁の国宝重要文化財等保存整備費補助事業の採択を受け、多可町教育委員会が主体となり実施した。

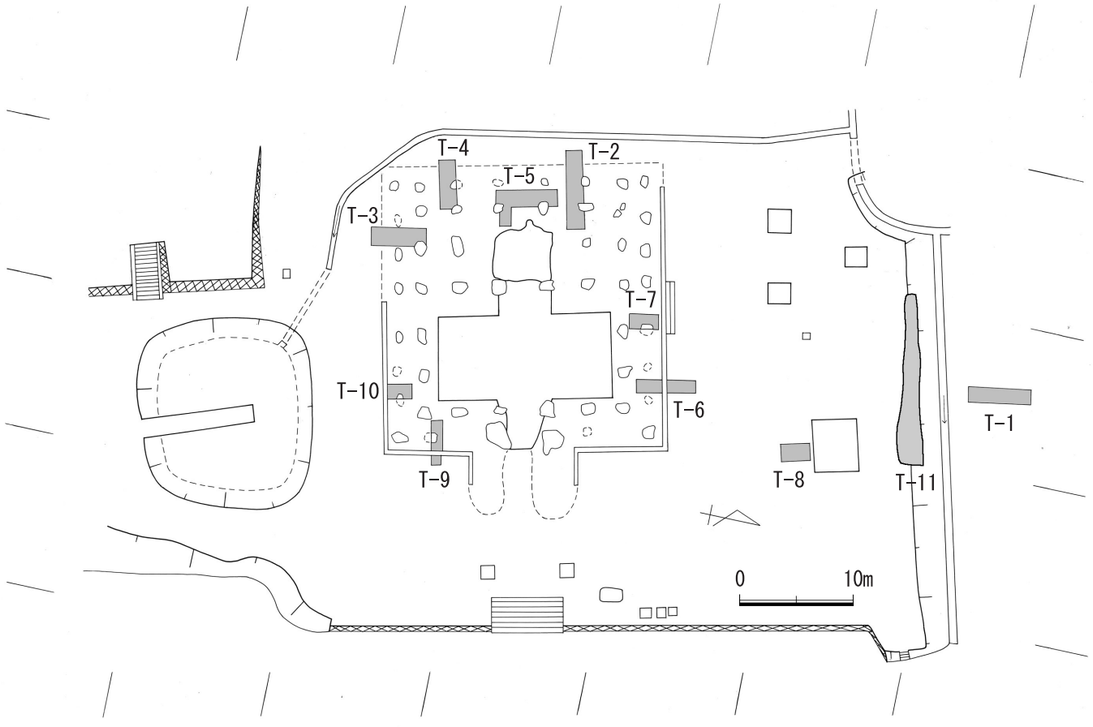
《発掘・整理作業》　発掘・整理担当　宮原文隆
補　　助　　員　早崎喜代美
整 理 技 術 員　松田優子、安平千恵美

《発掘・整理作業従事者》

徳平麻希、吉田衣里

《調査・整理作業協力者、協力機関》（敬称略）

池田征弘、岡田章一、小川真理子、岸本一郎、立花　聡、永井信弘、西田　猛、村上　立、森　幸三、森下大輔、兵庫県教育委員会文化財課、兵庫県立考古博物館、伊勢和山極楽寺



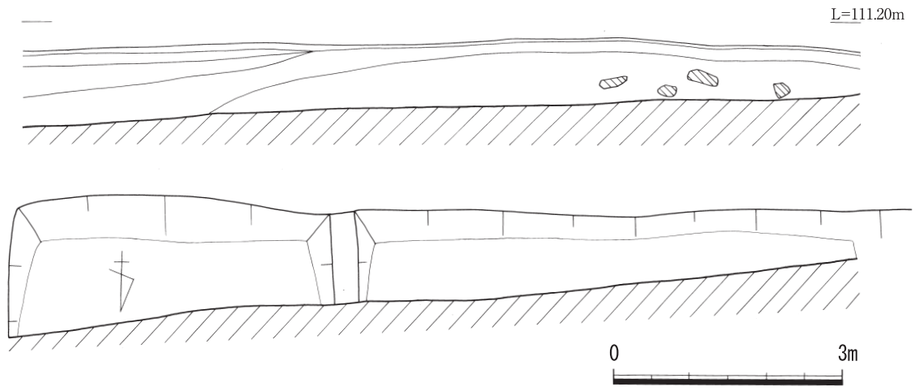
第15図　極楽寺遺跡調査位置図

2．調査の概要

調査は、掘削予定地部分についての T-11 のトレンチを設定して調査を進めるとともに、谷地形部掘削時における軒瓦等の特殊瓦の採集に努めた。調査面積は約 10 ㎡である。

調査の結果、T-11 では明確な遺構を検出できなかった。現表土から地山までの深さは約 90cm で、土砂の堆積は西から東方向へ土砂を押し出した状況を呈している。堆積土は、大きく 5 層に分層できる。1 層－腐植土層、2 層－近世瓦を若干含むぱさついた感じのにぶい黄橙色土、3 層

－若干の中世瓦を含むにぶい黄橙色土、４層－炭・灰を含むにぶい黄褐色土、５層－炭・灰を多量に含む黒褐色土で、この層下部では大きめの中世瓦片の出土を確認している。



第16図　T-11

３．出土遺物

今回の確認調査及び造成工事に伴う出土遺物は、土器類(1~25)、金属製品(F1~F12)、瓦類(26~75)[2]等がある。

(1) 土器類

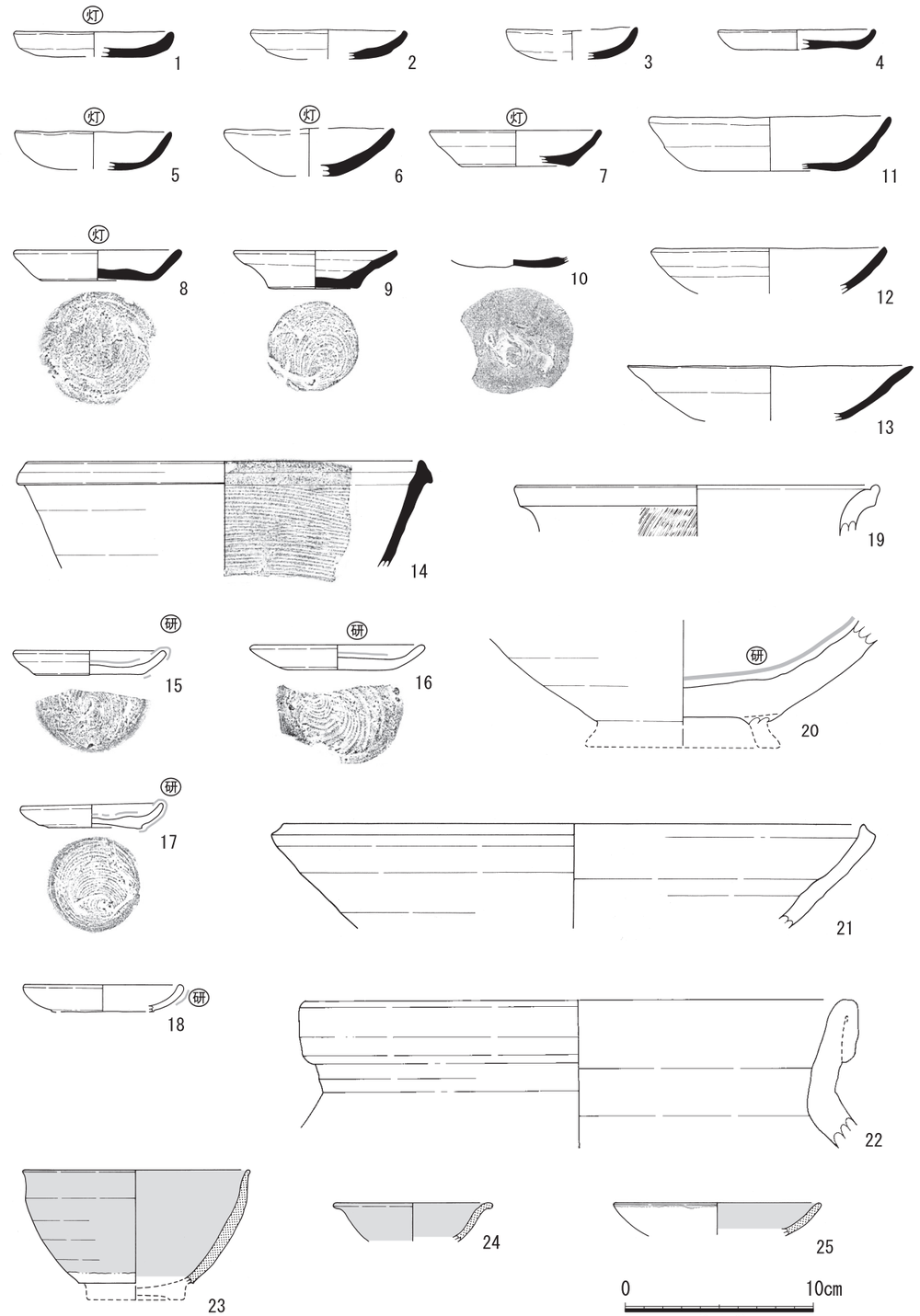
土師器小皿には、手づくねによって製作され底部未調整の(1~6)と、ろくろ成形で底部回転糸切りによって切り離された(7~10)がある。これらのうち(1･5~8)の５点の小皿口縁部を中心に煤けた痕跡が看取でき、灯明皿として使用されたことを窺うことができる。(3･4) は２次的な焼成を受けたためか、全体にくすんでいる。(10)は須恵器の可能性もある。(8)が平安時代後期の所産で土師器小皿では最古の遺物である。小皿(9)は内面に強いロクロ目を有し、逆時計廻りのろくろ回転によって底部を切り離され、ラッパ状に開く形態で16世紀代の所産[3]である。皿は(11~13) の３点が図化できた。(13)は京都系土師器である。土師器すり鉢(14)は、焼成が堅緻で、内面にすり目を意図した横方向の粗い刷毛目が看取できる。

須恵器小皿(15~18)では、(15~17)に体部への研磨痕跡が確認できる。特に(17)は内外面に顕著である。(20)は盤状を呈する容器の底部であるが、内面は摩耗が顕著で墨が看取できる。転用硯として使用されたものと推定される。(21)はこね鉢、(22)は16世紀代の備前焼甕である。

天目茶碗(23)、15世紀後半～16世紀代の端反り口縁部を有する白磁皿(24)、17世紀後半～18世紀前半の肥前系緑釉皿(25)がある。

(2) 金属製品

(F1~F5) は、断面が方形を呈する鉄釘である。(F1) は全長20.1cmを測り、頭部はＬ字状

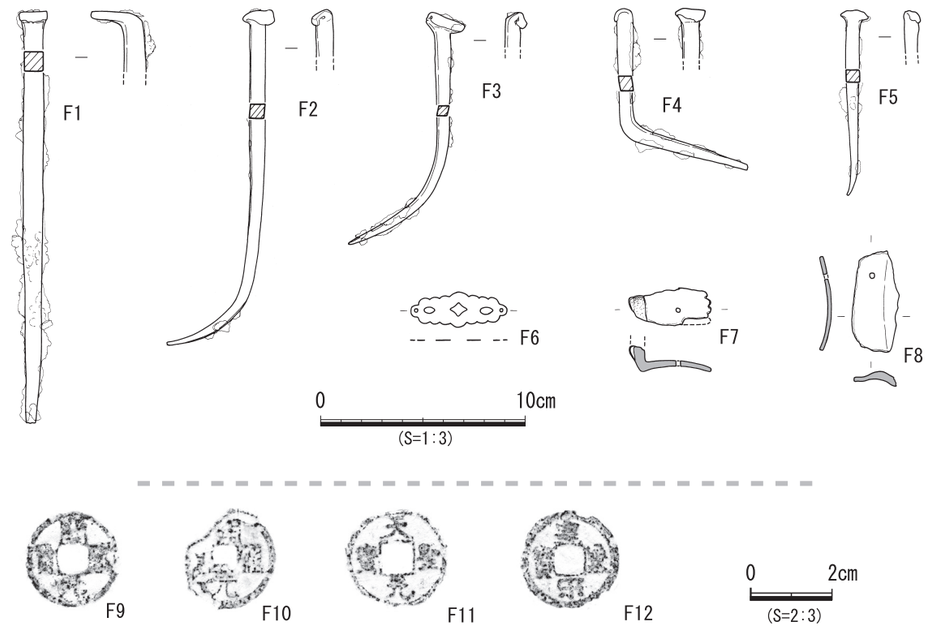


第17図　極楽寺遺跡出土遺物(1)

に折れ曲がった皆折釘である。(F2~F5)は頭部を叩いて巻き込んだ巻頭釘で、全長は(F2)が約19cm、(F5) が約９cm を測る。

(F6~F8)は、青銅製品である。(F6)は釘による打ち付けるタイプの貼付飾り金具で、表面には細工は看取できない。厚さは１㎜未満で非常に薄い。(F7)は鋳造された仏像等の足の部位と推定される。ほぼ中央に径２㎜の孔、先端には指と思われる凹凸が看取できる。(F8)は用途不明製品の破片で小孔を確認できる。

(F9~F12)は、古銭で中世の所産と考えられる。(F9･F10)は「開元通寶（初鋳 621 年）」で、(F10)は２次的な受火により裏面で他の銅銭と溶着している。(F11)は「天聖元寶（初鋳 1023 年）」、(F12)は「皇宋通寶（初鋳 1038 年）」である。



第18図　極楽寺遺跡出土遺物(2)

(3) 瓦類

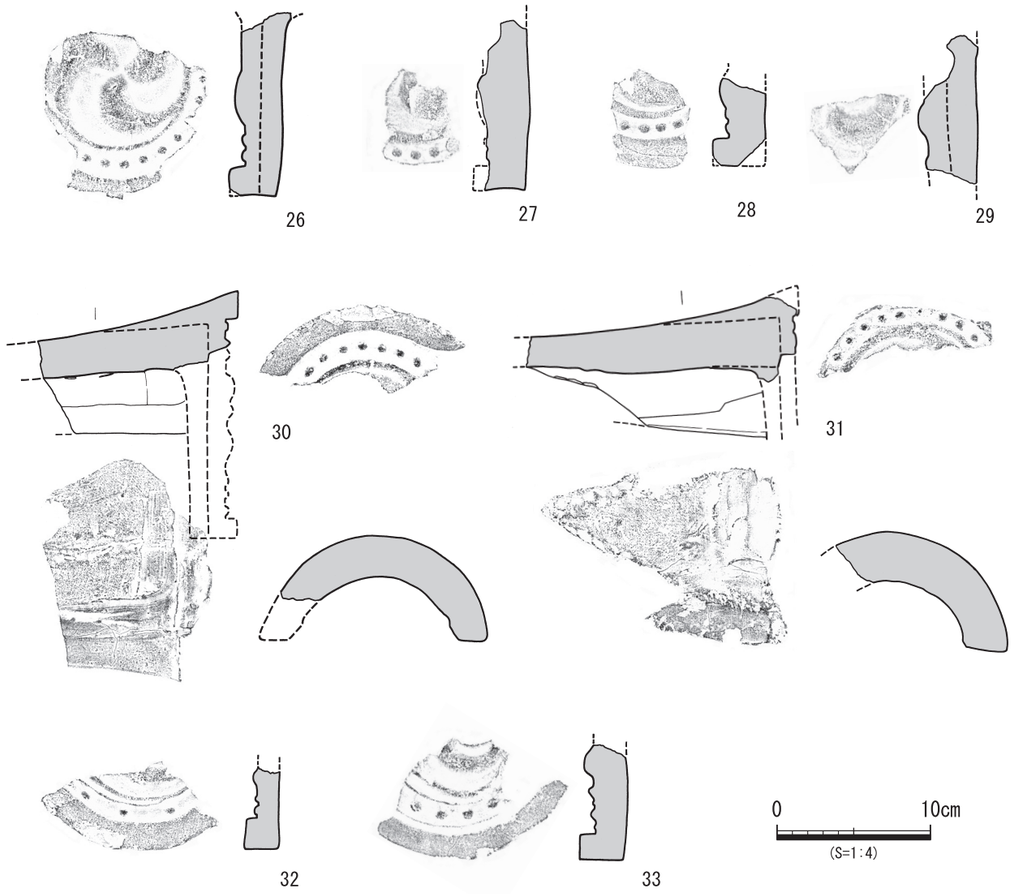
①軒丸瓦

軒丸瓦は、2008 年の調査で軒丸瓦Ａ類とＢ類の二種類が確認されていたが、今回の調査によって新たに確認されたのが軒丸瓦Ｃ類である。いずれのタイプも左巻き三巴文を有する意匠である。

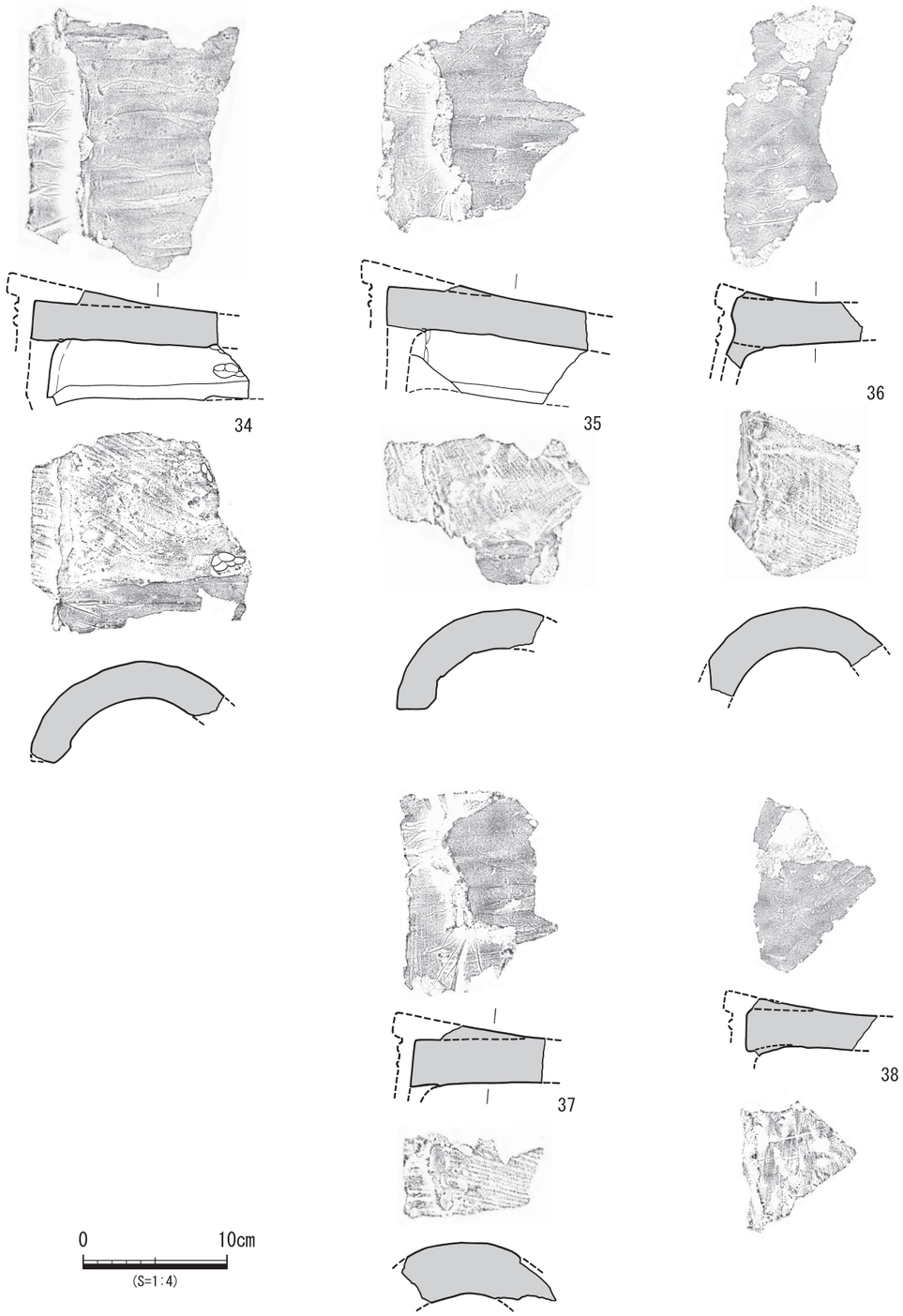
軒丸瓦Ａ（26~31）は、左巻き三巴文の周囲に復元数 28~29 個の珠文を配する。巴文の断面は、頂部が平らな低山形をなし、その巴頭部はやや丸みを持って尖り気味となり、巴頭部が先端で接し気味となる。一方、巴尾部は他の巴部と連結し圏線状を呈する。

瓦当裏面の接合部は、丸瓦凹面と瓦当の接合部をなでた後に、丸瓦凹面の側面に沿ったなでを施している。また、瓦当と丸瓦の接合は、笵木に厚さ約１cm 以上の粘土板を押し込み、上部に丸瓦を設置した後に、瓦当裏面相当部に１cm 以上の厚さの粘土板を補填しているため、瓦当の器壁厚は 3~4cm と分厚い傾向を呈している。

軒丸瓦Ｂ類(32)は、左巻き三巴文の周囲に復元数 15 個の珠文を配する。今回の調査では１点のみの出土のため全容は明らかにし得ないが、2008 年調査の出土例を参考にすると、巴文断面は低い半円球状を呈する。巴頭部は大振りで丸みを有し、巴尾部は長く伸びて他の巴部と連結し圏線状をなす。瓦当裏面の接合部は、丸瓦凹面の側面に沿ったなでの後、丸瓦凹面と瓦当の接合部になでを施している。



第19図　極楽寺遺跡出土遺物(3)



第20図　極楽寺遺跡出土遺物(4)

軒丸瓦Ｃ類(33)は、左巻き三巴文の周囲に復元数15個の珠文を配する。軒丸瓦Ａと軒丸瓦Ｂとの違いは、巴尾部が他の巴部と連結しない点と珠文の周囲に圏線が巡る点にある。現状ではこの小片１点のみの出土であるため、今後の資料の追加を待ちたい。

(34~38)は、瓦当が剥落した軒丸瓦である。

②軒平瓦

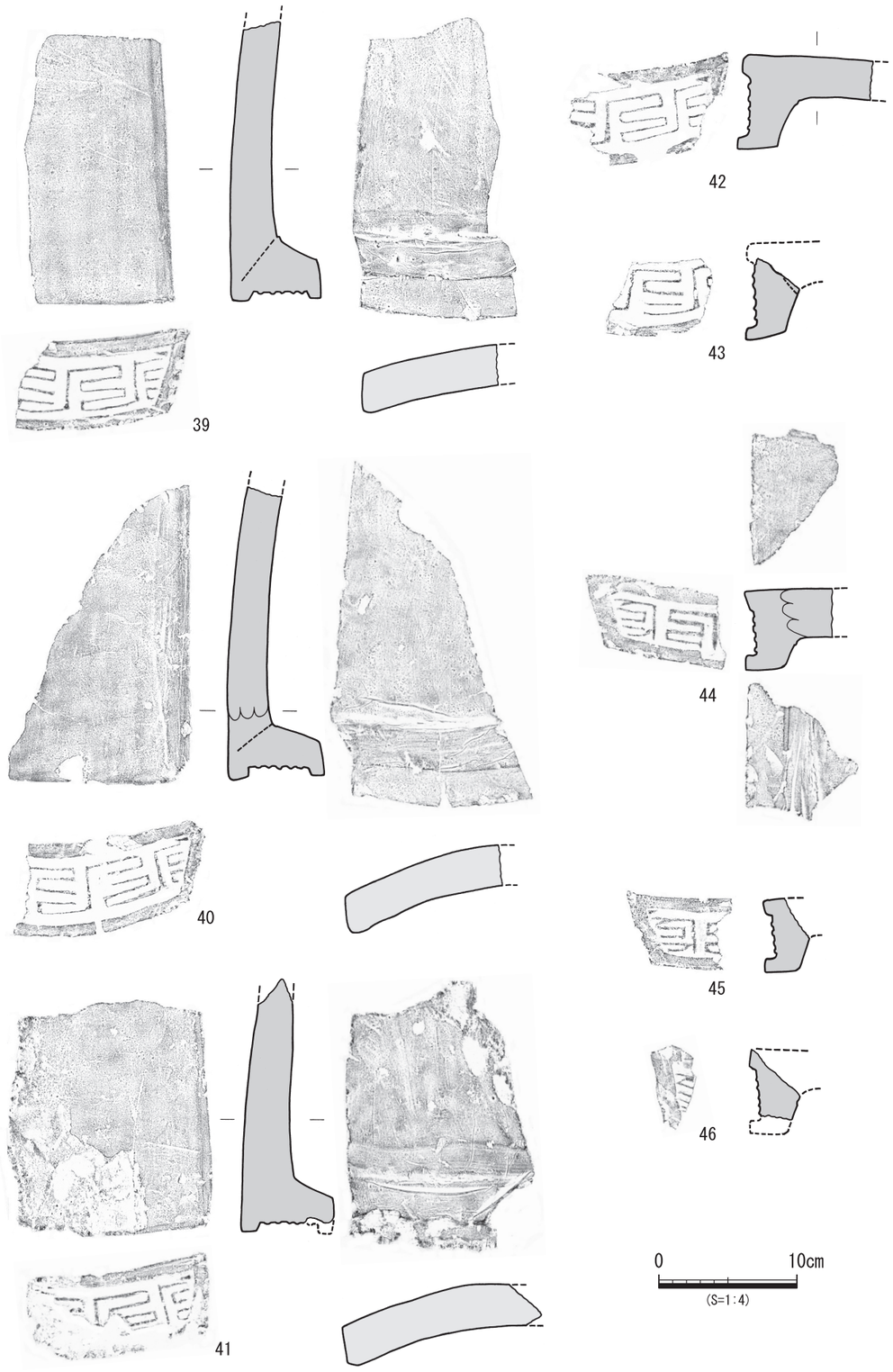
軒平瓦は2008年の調査では、軒平瓦Ａ類と軒平瓦Ｂ類の二種類が確認されていたが、今回の調査によって新たに確認された軒平瓦A2類と軒平瓦Ｃ類を追加しておきたい。なお、今回の出土瓦には全形が把握できるものはないので、2008年の調査成果を念頭に概説しつつ、前回報告の訂正も加えておく。

軒平瓦Ａ類(39~43)には、一見雷文のように見える瓦当文様が施されている。中央には棒状の中心飾り「𠂉」を配し、この中心飾りを挟んで向かって右側にアルファベットの「Ｆ」、左側に反転した「ꟻ」をほぼ一筆書きの状態で描いたような文様を配する。仮にこの「Ｆ」と見えるものを１単位と表現すれば、左右に２単位半で途切れた状態になっている。右隅上部には、小さく三角形状に浮き上がった意匠が看取できる。瓦当上縁には、弱い面取り状なでが施されている。瓦当上縁と下縁の中央付近の高さ(幅）は、約4.5cmを測る。瓦当接合方法は、(43)で明確な剥離面が確認できるように、瓦当貼付法によっている。この軒平瓦Ａ類と類似する意匠の瓦は、京都の臨川寺発掘調査で出土し、「雷文軒平瓦」として取り上げられていることが確認できている。[4)]

軒平瓦A2類(44~46･75）も、雷文状文様を有する瓦である。瓦当面は、中央部より左側の部位のみが遺存しており全容は明らかでないが、反転した「ꟻ」を配列している。(44~46･75）のすべてに、左外縁近くの文様内に笵傷が看取できる。瓦当上縁と下縁の中央付近の高さ（幅）は、約4.0cmを測る。瓦当面左上隅には、三角形状の意匠が存在するもの(44･45･75)と三角形状の意匠がないもの(46)の二種があるが、これが単に粘土の押し込め状況の違いに起因するものであるかどうかの判断は難しい。また、(44･45･75)では、顎後縁に緩やかな面取りなでが施されている。瓦当接合方法は、(75）の観察結果から、瓦当貼付法を採用していると推定される。また、(75）の凸面と瓦当接合部の顎部に、凹型台の圧痕と推定されるらしき痕跡が比較的明瞭に看取できる。

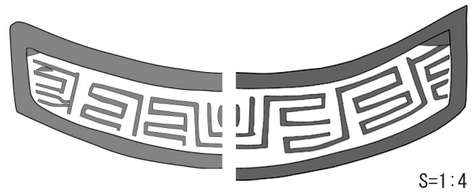
なお、2008年調査の報告書で軒平瓦Ａ類とした(K14)[1)]は、この軒平瓦A2類と同一の位置に同じ笵傷が確認できる。当時は、小片で文様下部を充分に検討できない状態であったため軒平瓦Ａ類に含めていたが、軒平瓦A2類の三角形状の意匠がないタイプとして修正しておきたい。

軒平瓦Ａ類と軒平瓦A2類の最も大きな差は、雷文状文様にある。前者の文様は一筆書きのように連なっていたが、後者では、「ꟻ」の意匠を繋ぐ下部の横線が失われており、単体の「ꟻ」を配列した状況を呈している。別の見方をすれば、軒平瓦A2類の文様は、軒平瓦Ａ類の笵木下部を切断したことで、連続的な文様の下部が切り取られ、単体の意匠を配したような文様とし



第21図　極楽寺遺跡出土遺物(5)

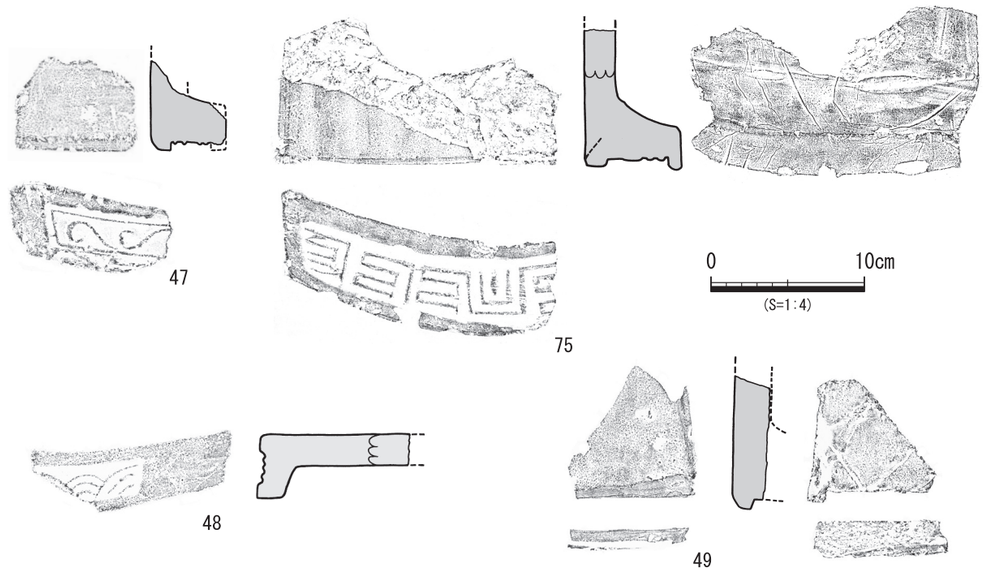
て成立したことが理解できる。軒平瓦 A 類と軒平瓦 A2 類の瓦当上縁と下縁の中央付近の高さ(幅)は、前者が約 4.5cm、後者が約 4.0cm と短くなっており、范の改変を反映しているのであろう。また軒平瓦 A 類には、瓦当上縁に弱い面取り状なでが施されるのに対して、軒平瓦 A2 類は顎後縁の弱い面取りなでが施されていることも、両者を区分する指標の一つになろう。



第22図　軒平瓦A2類(左)とA類(右)の模式図

軒平瓦 C 類の(47)は、瓦当の界線内に唐草文を配し、上縁には面取りの削りが施されている。外縁の幅が広くなっており、中世後半の様相を有している。

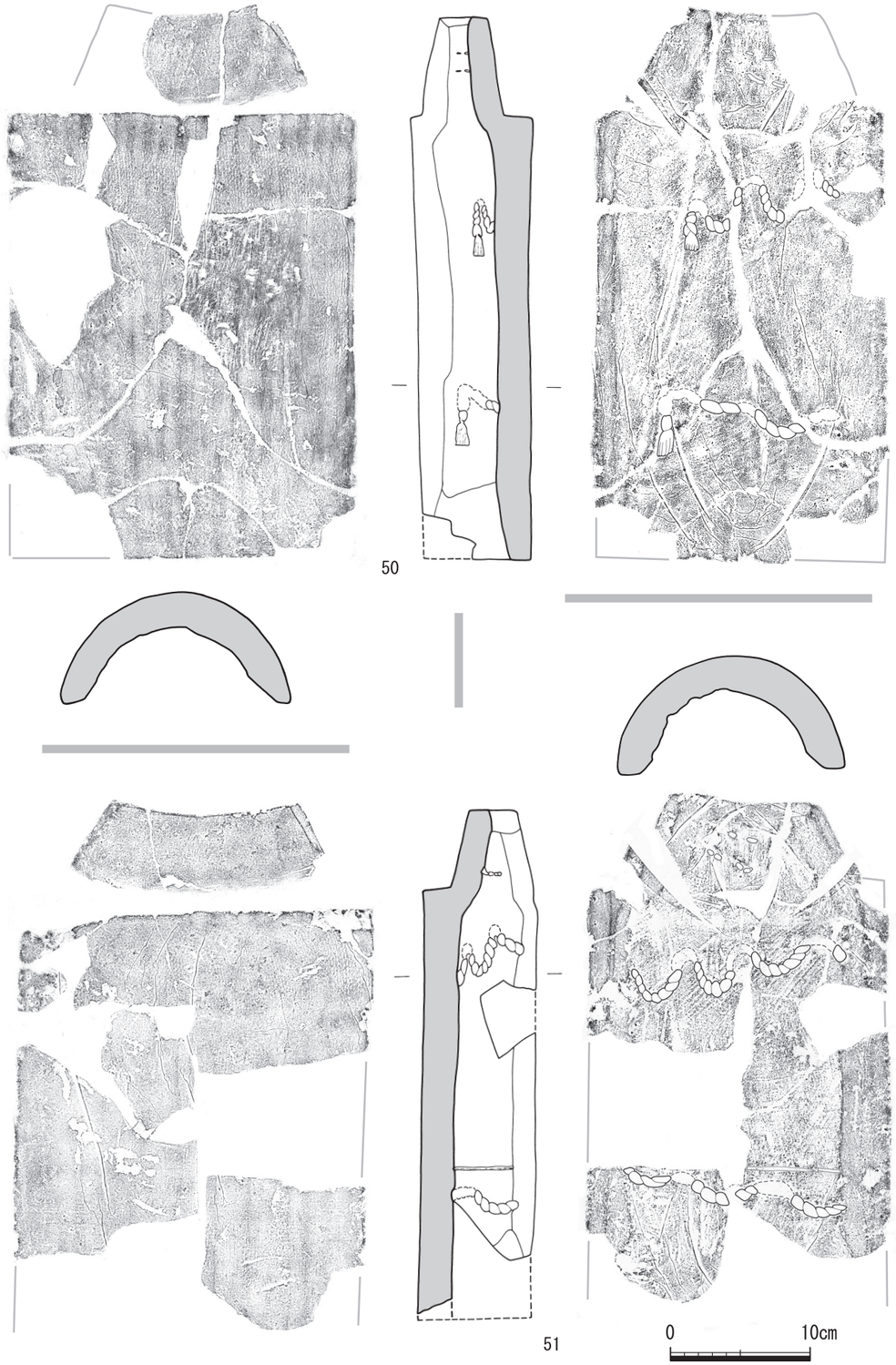
波状文軒平瓦(48)は、近世の所産と考えられる。顎貼付部で剥落する軒平瓦(49)には、凹面に布目が遺存し、瓦当上縁には幅広の面取り削りが施されている。また瓦当面側から斜め方向に焼成前の切り込みが看取できる。この切り込みは器壁の厚さの約 1/3 程度であり、どのような意図を持って為されたのかは不明である。



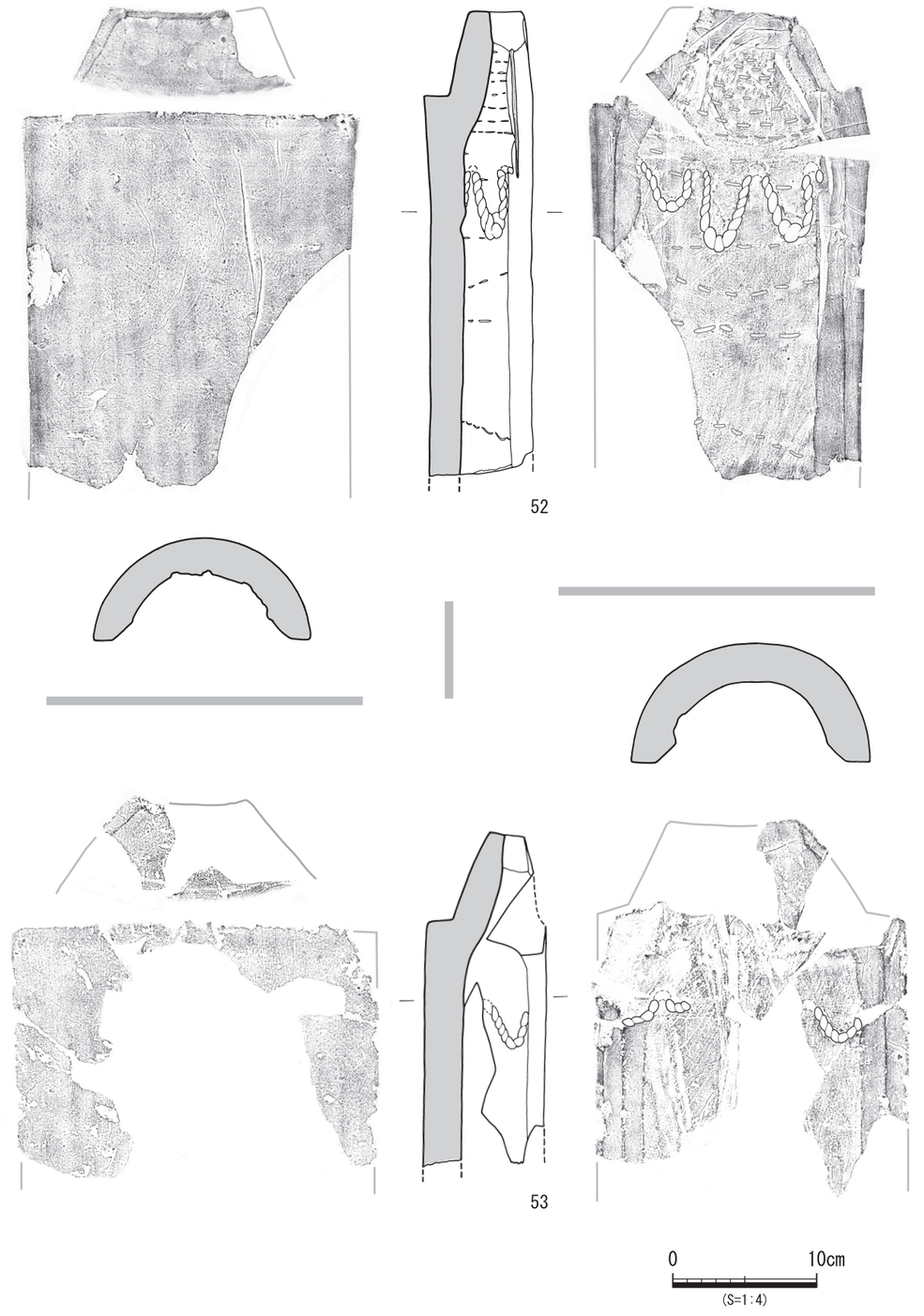
第23図　極楽寺遺跡出土遺物(6)

③丸瓦

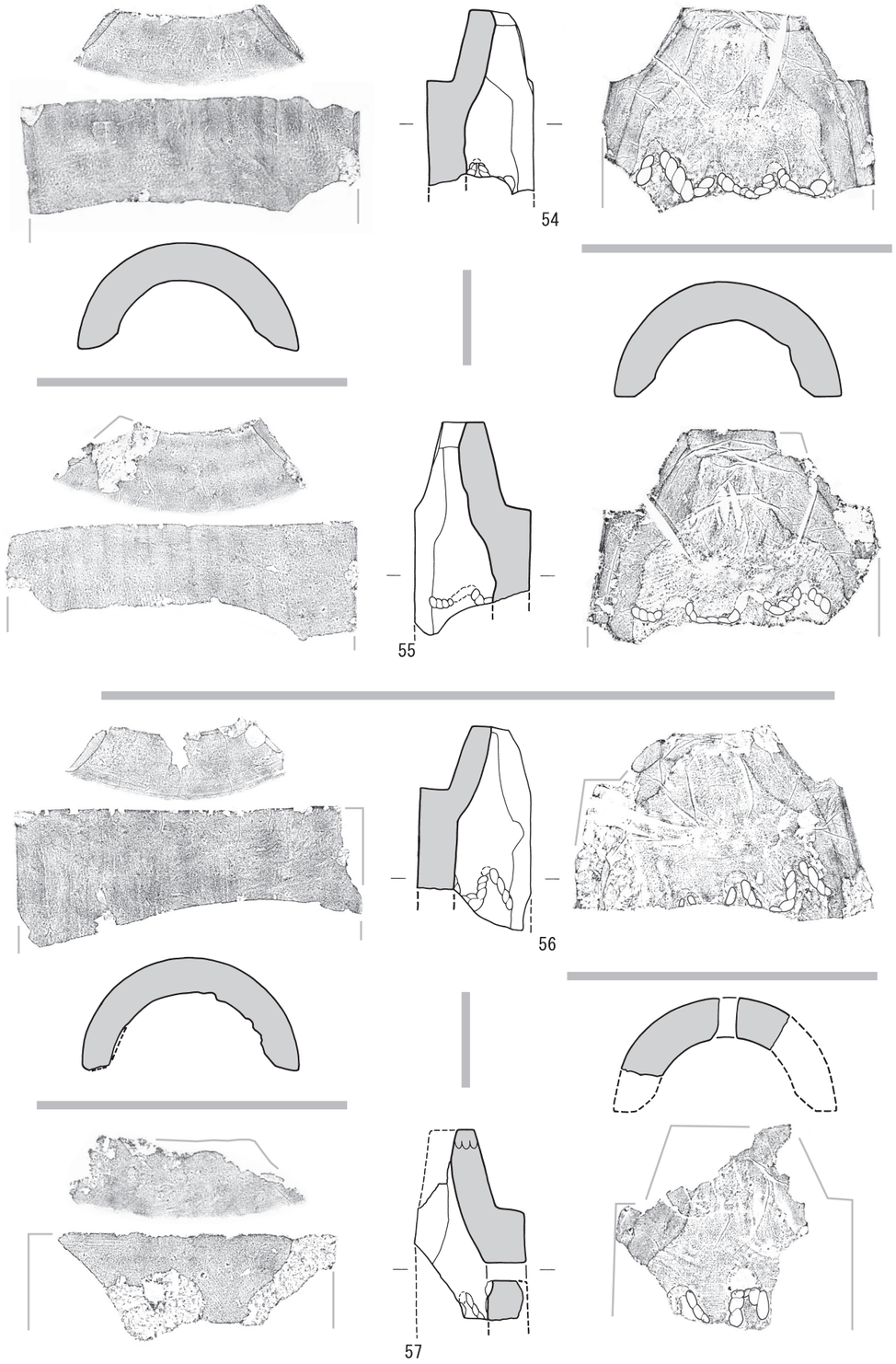
2008 年調査の報告書において丸瓦は、丸瓦 A 類と丸瓦 B 類の 2 つに分類した。凹面に残る吊り紐痕跡(圧痕)の状況を基準として、丸瓦 A 類は吊り紐の布帛への通し縫いによって、吊り紐の隠れている部分と見えている部分の比が 1：2 以下で、布でかくれている部分が比較的多いものとした。丸瓦 B 類は玉縁基部角面取りを施している丸瓦で、これらの凹面吊り紐圧痕の状況は、



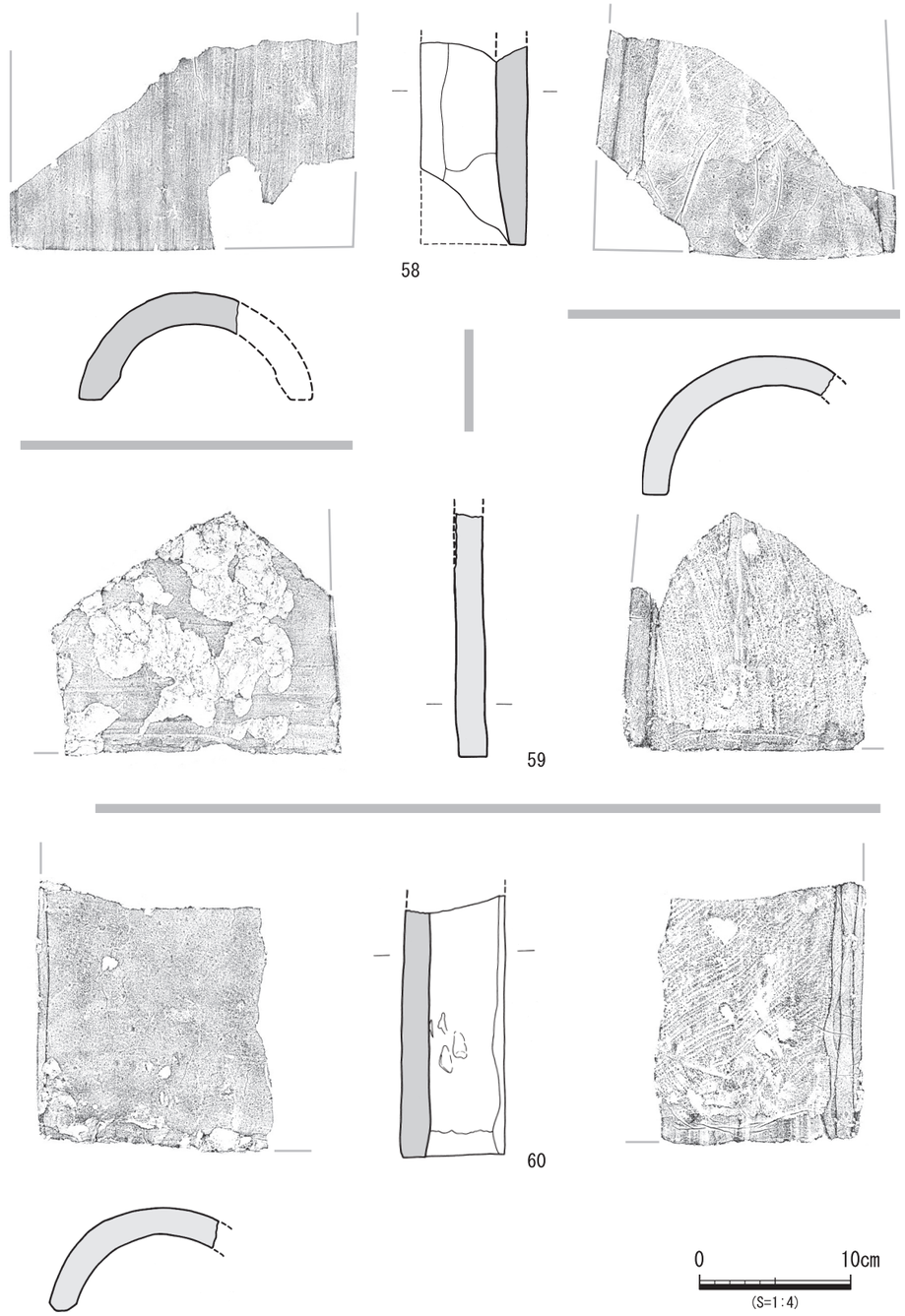
第24図　極楽寺遺跡出土遺物(7)



第25図　極楽寺遺跡出土遺物(8)



第26図　極楽寺遺跡出土遺物(9)



第27図　極楽寺遺跡出土遺物(10)

布帛の内側に隠れる部分が少なくなる傾向があるものとした。この丸瓦Ａ類と丸瓦Ｂ類は、器壁が2~2.5cmと比較的厚く、凹面に縄叩きの後縦方向のなでが施される。また、凹面の側縁際に、幅広の面取りの削りが施されてるという共通性がある。

今回の調査の出土資料を見てみると、丸瓦全形を把握できるのは(50)のみで、他の資料はいずれも破片となっている。これらの資料の玉縁基部と凹面吊り紐圧痕の状況をみてみると、玉縁基部角面取りが施された資料はなく、丸瓦Ｂ類に該当する丸瓦が存在しない。次に凹面吊り紐圧痕の状況を見ると、布帛への通し縫いによる隠れ部分と見えている部分の比が１：２以下で、布でかくれている部分が比較的多いものも存在しないため、丸瓦Ａ類に該当する丸瓦がないことになる。このため凹面吊り紐圧痕の状況に注目し、布帛への通し縫いによる隠れ部分よりも見えている部分が多い傾向を有する丸瓦を、丸瓦A2類と設定しておきたい。

この丸瓦A2類となる(50)は、やや焼成が甘く全長38.8cmを測る。凸面狭端近くに縄叩きが明瞭に遺存し、凹面の吊り紐痕跡(圧痕)の布帛への通し縫いによる隠れ部分と見えている部分の比は１：１程度である。他の丸瓦(51~57)も丸瓦A2類に該当し、(57)には釘孔と考えられる穿孔が、玉縁でなく、丸瓦胴部に看取できる。

そしてまた新たに丸瓦Ｃ類(59･60)を提示しておきたい。この丸瓦Ｃ類は、丸瓦の器壁の厚さが1.8cmと比較的薄いこと。また、凸面には縄叩きが確認できず、横方向の強いなでによって仕上げられ、凹面には布帛の吊り紐がなく、側縁際には狭隘な面取りの篦削りを施している点を特徴として上げることができる。

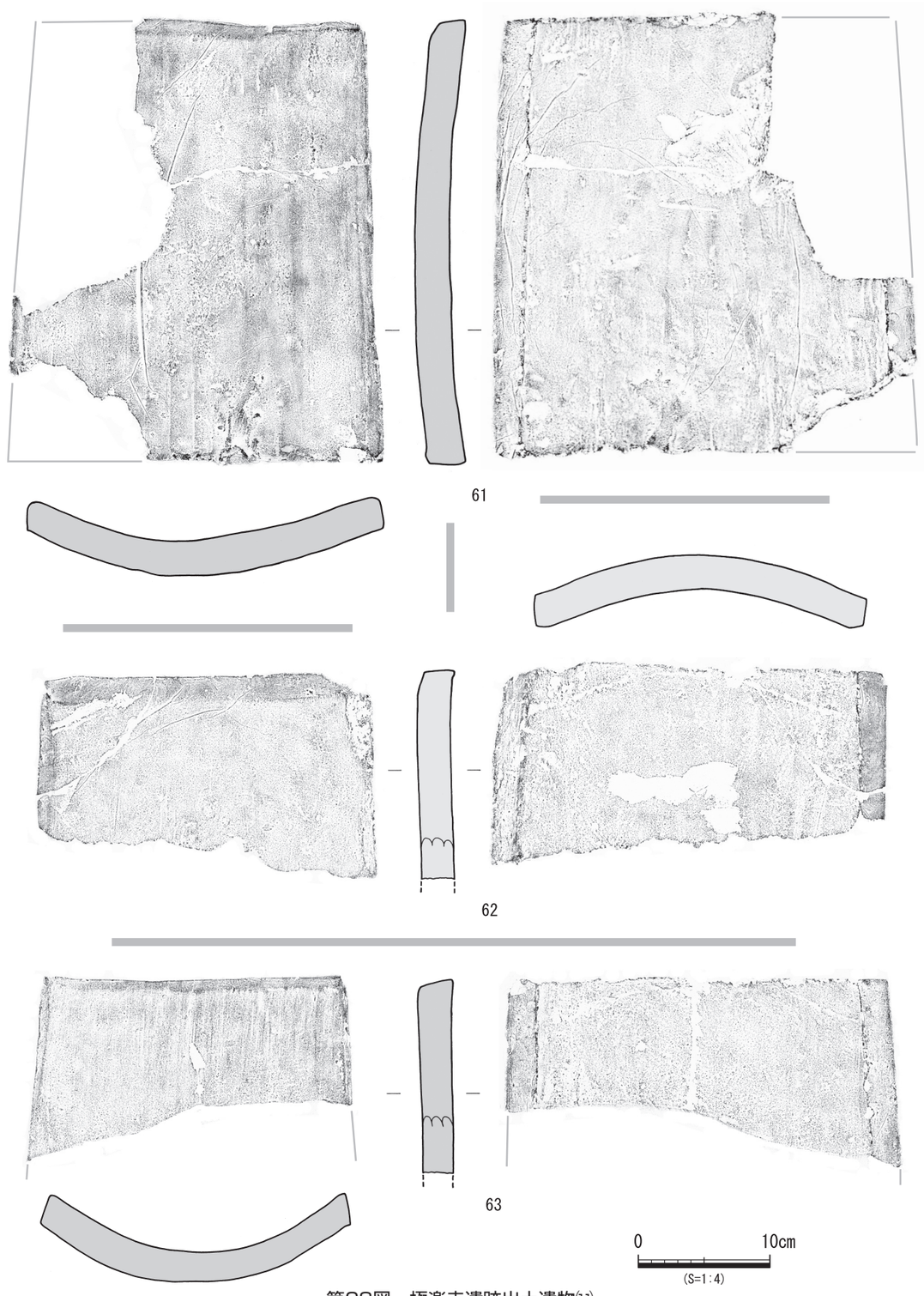
④平瓦

前回の報告において平瓦は、凹面に残された布目の有無によって、布目が確認できる平瓦Ａ類と布目が確認できない平瓦Ｂ類の２つに分類した。本報告でも、この分類基準に従っておく。なお基本的に平瓦の凸面には、離れ砂が確認でき、その砂を払い落とすような縦方向若しくは不整方向のなでが施されている。

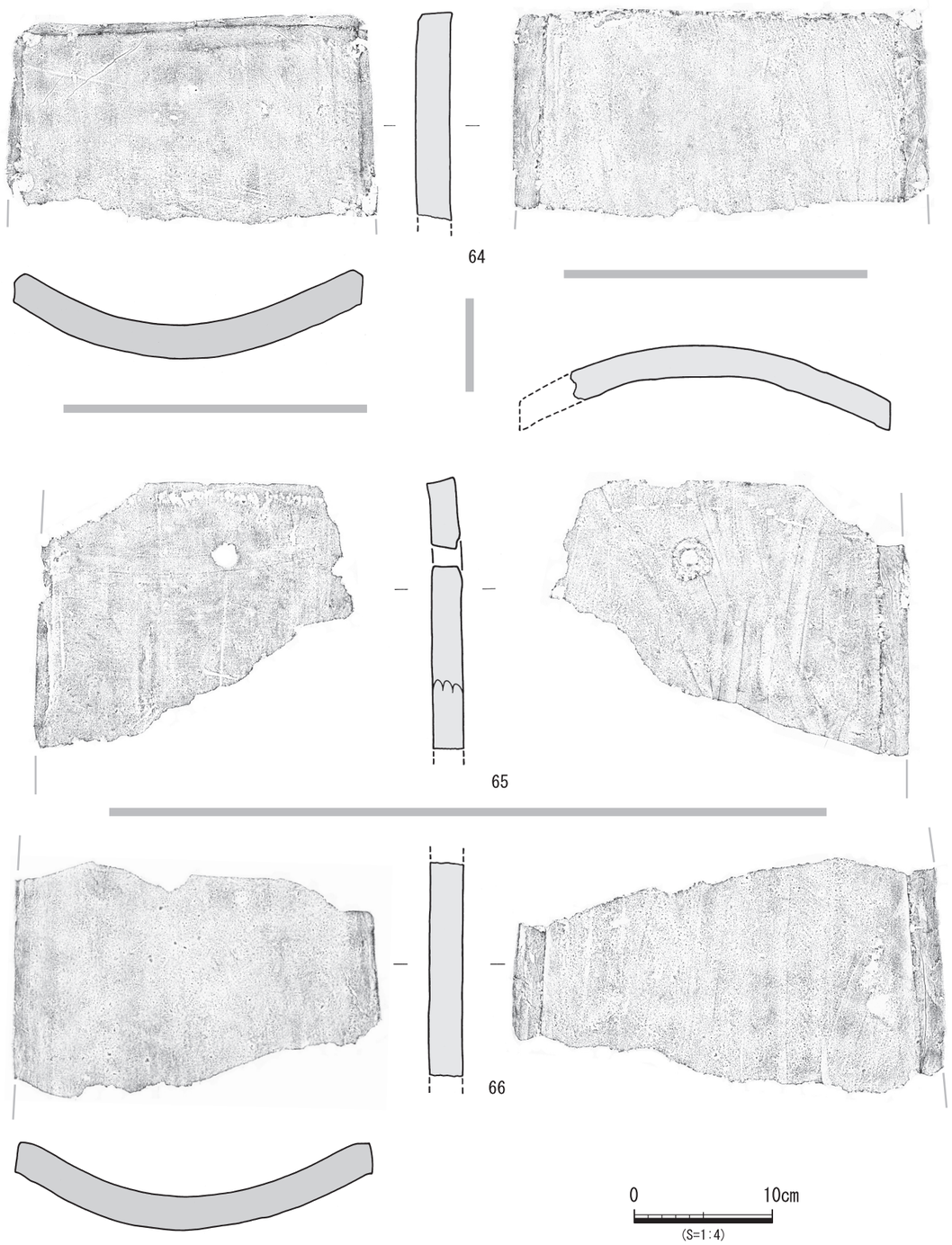
平瓦Ａ類(63~65)は、凹面に布目が確認できる。(63･64)には、布目圧痕を消去することを意図した縦方向のなでが施されている。釘孔を有する(65)では、焼成後凸面側の穿孔部分の盛り上がった周囲を、敲打によって整え平滑にしている。この凹面には、狭端面側と側面側に布帛の端が確認でき、狭端面側では経糸のほつれた状態を窺うことができる。

平瓦Ｂ類(61･62)では、凹面に布目が確認できない。凹面には板状工具を用いて叩き整えたような痕跡をみることができる。ほぼ全体を把握できる(61)では、全長33.5cm、広端面付近の幅26.7cmを測る。

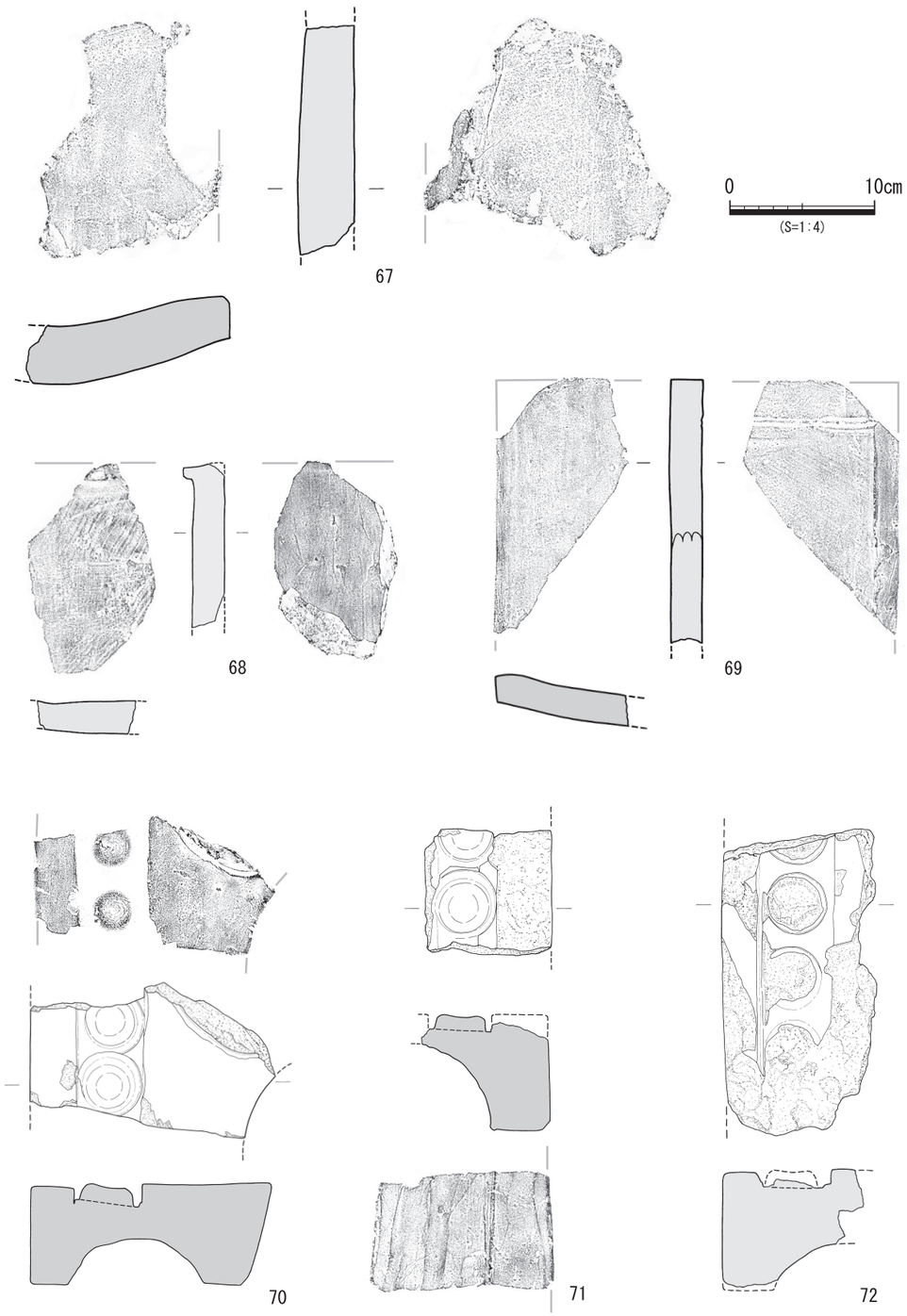
(66･67)の凹面には、布目痕跡を確認できないが、明確でないところもあるのでその帰属については保留しておきたい。(67)は器壁が4.0cmと厚く、色調も橙色を呈することから、やや特殊な瓦であるかもしれない。



第28図　極楽寺遺跡出土遺物(11)



第29図　極楽寺遺跡出土遺物(12)



第30図　極楽寺遺跡出土遺物(13)

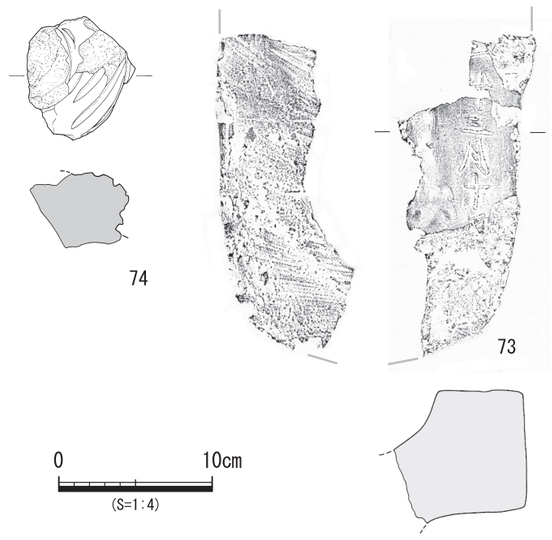
なお、(62･63･65)の凸面狭端面よりには、凹型台での作業を示すと見られる、緩やかな山形の圧痕が看取できる。

⑤その他の瓦

(68)は水切りと思われる突帯を有した瓦で、破風の部分に葺く軒平瓦を補強する二の平瓦と考えられる。凹面は布目が明瞭に遺存し、凸面には縦方向の篦なでが施されている。

(69)は、他の平瓦に比して谷の深さが浅いので、熨斗瓦と考えられる。凹面は布目を消し去るなで調整、凸面は離れ砂が看取できる。

(70~74)は鬼瓦片である。(70~72)は4.5~4.8cmの溝内に、中心部が若干凹んだ径3.8cmの珠文を並べた珠文帯を配している。いずれも鬼瓦の脚部付近の破片になろう。(73)は鬼瓦の頭部近くの部位で、倒立した状態で「□年三月十五□」の篦描きが施されている。裏面には、こびき痕が明瞭に残る。(74)は鬼瓦の眉部の破片で、篦で刻むことにより表現されている。



第31図　極楽寺遺跡出土遺物⑭

4．小　結

今回の極楽寺遺跡の確認調査では、旧本堂敷地北面には石垣等の施設は存在しないことが確認された。また、幾たびかの堂宇の再建・改修にかかる整地の際に、谷傾斜部へ瓦礫や土砂が押し出すことによって、平地に整えられて、現在に残る景観が形成された事が明らかとなった。

出土遺物では、瓦において新たな資料を追加することができた。今後、他地域の出土資料との比較検討がなされ、社会的な関係を推し量る資料となることが期待される。

註

1）『極楽寺遺跡』　多可町文化財調査報告11　多可町教育委員会　2010

2）当報告書入校直前に、村上立氏により極楽寺境内で採集された。報告すべき資料と判断し、(75)として追加掲載した。

3）宮原文隆「極楽寺遺跡北群における中世後半期の土師器小皿」『極楽寺遺跡 北群』　多可町文化財調査報告15　多可町教育委員会2011

4）『臨川寺旧境内跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第Ⅳ冊（財)京都市埋蔵文化財研究所　1979　また中世瓦については、池田征弘氏より教示を得た。

表2　極楽寺遺跡　遺物観察表

- 法量は（　）現存高、－は不明である。
- 成形・調整等の（　／　）は（本数／㎜）である。
- 調整の「手なで」は手持ちのなでを示す。

遺物番号	実測番号	器種		法量(cm)			色調	成形・調整等		備考
		種類	器種	口径	器高	底･脚径		外面	内面	
1	5	土師器	小皿	8.4	(1.3)	－	褐灰	口縁部手なで、体部未調整	手なで	灯明痕跡あり、歪みあり
2	4	〃	〃	8.2	(1.5)	－	黒褐	口縁部手なで、体部未調整	手なで	
3	7	〃	〃	－	(1.6)	－	黒褐	未調整	手なで	歪みあり、2次焼成？
4	6	〃	〃	8.4	1.0	－	黒褐	未調整	手なで	2次焼成？
5	8	〃	〃	8.2	2.0	－	にぶい黄褐	口縁部手なで、体部未調整	手なで	灯明痕跡あり
6	11	〃	〃	－	(2.5)	－	橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで	灯明痕跡あり
7	3	〃	〃	9.0	1.9	6.1	明褐	口縁部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	灯明痕跡あり
8	2	〃	〃	8.8	1.6	5.9	橙	口縁部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	灯明痕跡あり、ロクロ回転時計回り
9	1	〃	〃	8.5	2.0	4.9	明黄褐	口縁部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	ロクロ回転逆時計回り
10	13	〃	〃	－	(0.5)	－	灰	底部篦切り？後研磨痕	ロクロナデ	研磨痕顕著、須恵器か
11	9	〃	皿	12.8	2.8	－	灰黄	口縁部手なで、体部未調整	手なで	2次焼成？
12	10	〃	〃	12.4	(2.4)	－	にぶい黄橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで	
13	12	〃	〃	15.0	(2.9)	－	浅黄橙	口縁部手なで、体部未調整	手なで	京都系土師器
14	14	〃	すり鉢	21.2	(5.6)	－	褐	口縁部横なで	体部横方向すり目(6／10)	口縁部重ね焼き痕あり､須恵質
15	16	須恵器	小皿	8.2	(1.3)	6.0	灰	口縁部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	ロクロ回転時計回り､口縁部重ね焼き痕あり､研磨顕著
16	18	〃	〃	9.2	1.3	6.3	灰	口縁部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	ロクロ回転時計回り､口縁部重ね焼き痕あり､一部研磨痕あり
17	15	〃	〃	7.5	1.3	4.8	灰	口縁部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	ロクロ回転時計回り､口縁部重ね焼き痕あり､研磨顕著
18	17	〃	〃	8.6	1.4	5.4	灰	口縁部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	口縁部重ね焼き痕あり､一部研磨痕あり
19	21	〃	甕	19.4	(2.7)	－	灰	口縁部横なで、頸部平行叩き(4／10)後横なで	横なで	
20	19	〃	底部	－	(5.5)	－	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	内面研磨痕顕著、墨付着、転用硯
21	20	〃	こね鉢	32.0	(5.5)	－	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部重ね焼き痕あり
22	24	備前焼	甕	29.6	(7.8)	－	極暗赤褐	横なで	横なで	
23	23	陶器	天目茶碗	12.0	(6.0)	－	(胎)灰黄、(釉)@@	－	－	
24	25	白磁	小皿	8.4	(2.0)	－	(胎)灰白	－	－	
25	22	陶器	小皿	11.0	(1.7)	－	(胎)灰黄、(釉)灰黄	ロクロナデ	－	外面煤付着
26	K40	瓦	軒丸瓦A	瓦当面復元径16.6cm			灰	瓦当面－左巻き三巴文、珠文、離れ砂	瓦当裏面－不整方向なで	
27	K43	〃	〃	－			灰	瓦当面－左巻き三巴文、珠文	瓦当裏面－不整方向なで	
28	K44	〃	〃	－			にぶい橙	瓦当面－左巻き三巴文、珠文、離れ砂	瓦当裏面－不整方向なで	
29	K42	〃	〃	－			灰	瓦当面－左巻き三巴文、離れ砂	瓦当裏面－不整方向なで	
30	K33	〃	〃	瓦当面復元径16.0cm			灰	瓦当面－左巻き三巴文、珠文、離れ砂。凹面－縦方向なで	凹面－布目	
31	K38	〃	〃	－			灰	瓦当面－左巻き三巴文、珠文、離れ砂。凹面－縦方向なで	凹面－布目	
32	K41	〃	軒丸瓦B	瓦当面復元径17.0cm			灰	瓦当面－左巻き三巴文、珠文、離れ砂	瓦当裏面－不整方向なで	
33	K39	〃	軒丸瓦C	瓦当面復元径15.0cm			灰	瓦当面－左巻き三巴文、珠文、圏線、離れ砂	瓦当裏面－不整方向なで	
34	K34	〃	軒丸瓦	－			灰	凸面－縦方向叩き(なで)	凹面－布目	
35	K35	〃	〃	－			暗灰	凸面－縦方向叩き(なで)	凹面－布目	
36	K36	〃	〃	－			にぶい黄橙	凸面－縦方向叩き(なで)	凹面－布目	
37	K37	〃	〃	－			灰白	凸面－縦方向叩き(なで)	凹面－布目	
38	K45	〃	〃	－			灰	凸面－縦方向叩き(なで)	凹面－布目	
39	K10	〃	軒平瓦A	－			灰	瓦当面－雷文状文。凹面－布目後なで	凸面－縦方向なで	
40	K12	〃	〃	－			灰	瓦当面－雷文状文。凹面－布目後なで	凸面－縦方向なで	
41	K11	〃	〃	－			暗灰～灰白	瓦当面－雷文状文。凹面－布目後なで	凸面－縦方向なで、顎取付部横方向なで	
42	K13	〃	〃	－			橙	瓦当面－雷文状文。凹面－布目後なで	凸面－縦方向なで、顎取付部横方向なで	
43	K14	〃	〃	－			灰	瓦当面－雷文状文	－	
44	K15	〃	軒平瓦A2	－			灰	瓦当面－雷文状文、離れ砂。凹面－布目後なで	凸面－縦方向なで、顎取付部横方向なで	
45	K16	〃	〃	－			灰	瓦当面－雷文状文、離れ砂	－	
46	K17	〃	〃	－			灰	瓦当面－雷文状文	－	
47	K19	〃	軒平瓦C	－			灰	瓦当面－唐草文、界線、離れ砂。凹面－なで	－	
48	K18	〃	軒平瓦	－			灰	瓦当面－波状文。凹面－なで	凸面－不明	
49	K20	〃	軒平瓦	－			橙	凹面－布目	－	
50	K21	〃	丸瓦	全長38.8cm			灰	凸面－縄叩き後縦方向叩き(なで)	凹面－布目	
51	K23	〃	〃	－			灰	凸面－縄叩き後縦方向叩き(なで)	凹面－布目	
52	K27	〃	〃	－			灰	凸面－縄叩き後縦方向叩き(なで)・縦方向なで、肩部1条なで	凹面－布目	
53	K22	〃	〃	－			灰	凸面－縄叩き後縦方向叩き(なで)	凹面－布目	
54	K28	〃	〃	－			灰	凸面－縄叩き後縦方向叩き(なで)・横方向なで	凹面－布目	
55	K29	〃	〃	－			灰	凸面－縄叩き後縦方向叩き(なで)・横方向なで	凹面－布目	
56	K30	〃	〃	－			灰	凸面－縄叩き後縦方向叩き(なで)・横方向なで	凹面－布目	
57	K31	〃	〃	－			灰	凸面－なで	凹面－布目	胴部穿孔(径13㎜)

遺物番号	実測番号	器種 種類	器種	法量(cm) 口径 器高 底・脚径	色調	成形・調整等 外面	内面	備考
58	K32	瓦	丸瓦	－	灰	凸面－縦方向叩き(なで)	凹面－布目	
59	K25	〃	〃	－	灰白	凸面－横方向なで	凹面－布目	
60	K24	〃	〃	－	灰	凸面－横方向なで	凹面－布目	
61	K8	〃	平瓦B	全長33.5cm	灰白～にぶい黄橙	凹面－縦方向叩き(なで)、離れ砂	凸面－縦方向なで、離れ砂	
62	K3	〃	〃	狭端面幅24.0cm	灰白	凹面－縦方向叩き(なで)、離れ砂	凸面－縦方向なで、離れ砂、山形圧痕あり	
63	K2	〃	平瓦A	狭端面幅21.6cm	灰	凹面－布目後縦方向なで	凸面－離れ砂、山形圧痕あり	
64	K1	〃	〃	狭端面幅24.0cm	灰	凹面－布目後縦方向なで	凸面－縦方向なで、離れ砂	
65	K4	〃	〃	－	灰	凹面－布目	凸面－縦方向なで、離れ砂	胴部穿孔(径13～15㎜)、布帛端圧痕あり
66	K5	〃	平瓦	最大幅25.7cm	灰	凹面－離れ砂	凸面－縦方向なで、離れ砂	
67	K6	〃	〃	－	橙	凹面－離れ砂？	凸面－離れ砂	
68	K52	〃	二の平瓦	－	灰	凹面－布目	凸面－縦方向なで	
69	K7	〃	熨斗瓦	－	灰	凹面－布目後なで	凸面－離れ砂後一部なで	
70	K46	〃	鬼瓦	－	暗灰	瓦当面－珠文径35㎜	裏面－篦削り	
71	K49	〃	〃	－	灰～にぶい黄橙	瓦当面－珠文径35㎜	裏面－篦削り	
72	K47	〃	〃	－	暗灰	瓦当面－珠文径35㎜(復元)	裏面－篦削り	
73	K48	〃	〃	－	灰	瓦当面－「□年三月十五□」の陰刻あり	裏面－篦削り、こびき痕顕著	
74	K51	〃	〃	－	灰	篦状工具による眉部	－	凹型台の使用らしき圧痕あり
75	K53	〃	軒平瓦A2	－	灰	瓦当面－雷文状文。凹面－布目後なで	凸面－縦方向なで、顎取付部横方向なで	
F1	37	金属製品	鉄釘	全長20.1cm	－	皆折釘		保存未処理
F2	35	〃	〃	全長19.5cm	－	巻頭釘		保存未処理
F3	34	〃	〃	全長13.3cm	－	巻頭釘		保存未処理
F4	36	〃	〃	全長11.8cm	－	巻頭釘		保存未処理
F5	33	〃	〃	全長9.1cm	－	巻頭釘		保存未処理
F6	32	〃	飾り金具	全長4.6cm、厚さ0.5㎜	－	青銅製		保存未処理
F7	31	〃	像	残存長4.0cm	－	青銅製、足部、孔径2㎜		保存未処理
F8	30	〃	用途不明製品	残存長4.9cm	－	青銅製、孔径2.5㎜		保存未処理
F9	28	銭貨	銅銭	径2.2cm	－	開元通寶(初鋳621年、唐銭)		保存不良、保存未処理
F10	27	〃	〃	径2.4cm	－	開元通寶(初鋳621年、唐銭)、他の銭貨と銹着		保存不良、保存未処理
F11	26	〃	〃	径2.4cm	－	天聖元寶(初鋳1023年、北宋銭)		保存不良、保存未処理
F12	29	〃	〃	径2.3cm	－	皇宋通寶(初鋳1038年、北宋銭)		保存不良、保存未処理

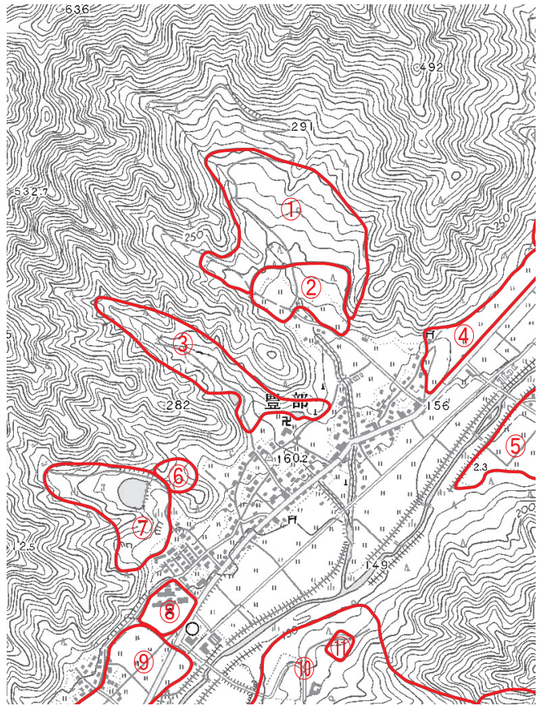
Ⅳ　豊部・森内谷遺跡の調査

1．はじめに

豊部・森内谷遺跡は、森内山の山麓に位置しており、現在、豊部集落内にある真言宗寺院極楽寺の前身寺院が存在していたと伝えられている。植林地が広がる山中には、八幡屋敷、阿弥陀屋敷、阿弥陀下などと呼ばれる通称地が残っており、中世～近世期の遺物も散布していることから、中世～近世の寺院遺跡であると考えられている。

また、周辺地域には、縄文時代後期～中世期に続く豊部･井杉遺跡、豊部･森内遺跡が山裾の扇状地に位置するほか、杉原川を挟んで東西の山中や山裾には､近世～近代期の鉱山跡が広がる。

今回、豊部・森内谷遺跡の広がる地域において、植林伐採、搬出用の作業道敷設が計画され、遺跡の広がりを確認するため、確認調査を行った。



第32図　周辺の遺跡分布図

①豊部・森内谷遺跡　②豊部・森内遺跡　③柏谷鉱山跡遺跡
④五社神社前遺跡　⑤郷領・吹屋場地区散布地
⑥豊部・寺谷地区散布地　⑦寺谷鉱山跡遺跡　⑧豊部・井杉遺跡
⑨豊部条理遺跡　⑩豊部・フショ谷周辺散布地　⑪豊部・フショ谷遺跡

【発掘調査期間】

2011 年 5 月 26 日～ 6 月 25 日

【調　査　体　制】

発掘・整理調査ともに、文化庁の国宝重要文化財等保存整備費補助事業の採択を受け、多可町教育委員会が主体となり実施した。

《発掘・整理作業》　発掘・整理担当　安平勝利
補　　助　　員　松田優子、徳平麻希
整 理 技 術 員　早崎喜代美、安平千恵美

《発掘・整理作業従事者》
足立好信　竹内弘司　中川寅男　中道和三男　森野恵三郎　吉田衣里

《調査・整理作業協力者、協力機関》
兵庫県教育委員会文化財室　多可町役場産業振興課　北はりま森林組合
公益社団法人西脇・多可シルバー人材センター

２．調査の概要

確認調査は作業道敷設工区に任意に 23 箇所のトレンチを設定して調査を行った（図版 17）。作業道敷設工区は、通称『八幡屋敷』『阿弥陀堂屋敷』と呼ばれる平坦地を含む、谷傾斜に沿って階段状にひろがる、平坦地が集中する A 地区、近世墓地及び近世期極楽寺跡である B 地区、谷底部の森内谷川に沿った C 地区の大きく３箇所に分けられる。

１）A 地区

〈T-1~T-7、T-20〉

工事区域は、現在、簡易な山道として使用されている部分と重なる。

いずれも、表土から 10~20cm 程度の灰褐色の流土の堆積がみられ、黄橙色の地山となる。遺構は確認されなかった。

T-6 は、宝篋印塔の基礎部分が、現在の山道沿いに置かれた状態にあった。表土直下で地山となり、宝篋印塔基礎部の下や周辺では、遺構は確認されなかった。おそらく、北側に小さな平坦地（工区外）が隣接しており、本来はその場所にあったものが崩落などにより落下し、後世に現在の場所に置かれたものと思われる。また、現在の山道部分では、表土直下で、約２m幅の石敷きを検出した。石敷きは、深さ約 40cm の溝状に掘削された内部に自然石を充填することによって構築されており、溝状の落込内部からは 19 世紀以降の遺物が出土していることから、近世末～近代以降の所産。当該地にある通称『八幡屋敷』『阿弥陀堂屋敷』の場所には、明治期まで建物があった（明治期に豊部五社神社に合祀）ことから、石敷道はそれらへの参道として使われていたものであろう。

各トレンチの埋土には、近世期の遺物のほか、小片ではあるが、10~15 世紀代のものが出土しており、『八幡屋敷』『阿弥陀堂屋敷』を含む、周辺に広がる平坦地群が、寺院として機能していた時期を示すものであると思われる。

〈T-8〉

尾根筋を削平して築かれた、１辺約 13 m四方の平坦地の前面（南面）を通る山道が、作業道として改良される計画であるため、山道部にトレンチを設置した。平坦地は石垣により区画されているが、かなり崩壊、埋没がすすんだ状態にあった。調査の結果、かろうじて部分的に遺存した５段の石垣を検出した。石垣は径 20~50cm の石材を使った野面積みで、基底石が据えられた地山面から平坦地上面までは約1.2m をはかる。石垣前面の埋土からは、隣接する平坦地から流出したと思われる 10 世紀末～ 13 世紀代の遺物が出土している。隣接する平坦地には、中世寺院関連遺構が存在するものと思われる。

〈T-21・22〉

平坦地群のひとつに設定したトレンチ。

約 15cm の表土・流土の下層に、約 35cm の厚みのにぶい黄橙色の盛土がみられ地山となる。当該地は緩やかに南へ向かって傾斜する地山面を切り盛りすることによって、平坦地がつくり出されている。盛土と思われる部分の埋土からは、図化し得るものは少ないが、中世期の須恵器、土師器、輸入磁器片が多く出土し、平坦地の造成が行われた時期を示すものであると思われ、寺院に関連する平坦地であろう。

〈T-23〉

若干崩壊はすすんでいるものの、野面積みによる石垣を検出した。石垣は、径約 15~60cm の石材が使われており、石積みが残っている高い部分で約 1.3 ｍをはかる。石垣前面の埋土からは中世期の須恵器、土師器が出土している。この石垣は、石垣後方（作業道工区西側）に広がる平坦地を区画しており、平坦地上には寺院関連遺構が存在するものと思われる。

２）B 地区

〈T-9・10〉

表土下に、約 20~30 ㎝のにぶい黄橙色土をおいて地山面となる。遺構、遺物は出土していない。

〈T-11〉

表土上面に土器が集中して散布する地点が確認され、トレンチを設定した。

約 10~15cm の表土・流土の下で地山が検出され、遺物は表土・流土内からの出土で、下層の地山面での遺構は検出されなかった。集中して出土した土器は、18 世紀の丹波焼甕１個体分である。周辺は旧墓地跡にあたることから、墓坑から掘り出されたのちに破棄されたものの集積であろう。

〈T-12〉

地表面観察において、２基の墓らしき石組み遺構が観察された。

墓１は墓石をのせる基礎部分の石囲いが遺存、墓２は石囲い部分の一部が遺存した状態で検出した。墓１は、大きな木根が土坑中央にあり途中で掘削を断念した。墓２は、上部が径約 50cm の円形、下部は方形状を呈する墓坑。深さは約 95cm をはかる。墓坑内からは、ガラス瓶（薬瓶か？）と六道銭が出土したほか、棺桶部材と思われる木片が出土した。六道銭は６枚出土しており、そのうちの３枚は裏面に「文」と刻印されている。ガラス瓶が出土していることから、明治期以降の墓であろう。

〈T-13〉

T-12 のすぐ東側に位置する。

地表面観察では、若干小石の集積がみられる程度であったが、小石集積下層で径約 80cm の円形の墓坑を検出した。墓坑内からは丹波焼の蓋と甕を組み合わせた甕棺が検出され、甕棺内からは漆器椀が出土している。時期は 18 世紀末～ 19 世紀代に比定される。その他、小石集積部分から土師器皿が２点出土している。

３）C 地区

〈T-14~19〉

いずれも、にぶい黄橙色の砂礫質土が約 10~40 ㎝前後堆積し、地山面となる。遺構、遺物は確認されなかった。

３．小　結

豊部・森内谷遺跡は、標高約 651 ｍの森内山の南山麓にひろがる寺院関連遺跡として知られている。山中には「八幡屋敷」、「阿弥陀堂屋敷」、「阿弥陀上」、「阿弥陀下」など、寺院関連の通称名を残す場所が多く、石垣を備えた平坦地群や墓地跡には、中世～近世期の遺物が広く散布している。

調査の結果、豊部森内谷遺跡は、中世期を中心とする A 地区、近世期を中心とする B 地区に広がっていることが確認された。

A 地区には、上記の通り、寺院関連の通称地が多く残り、石垣、石列で囲まれた平坦地群が広がる。当地区に設定した各トレンチからは、T-6 の近世期石敷遺構、T-8 の石垣遺構以外は明確な以降は検出されなかったが、埋土からは 10 世紀末～ 15 世紀にかけての遺物が出土しており、『八幡屋敷』、『阿弥陀堂屋敷』と呼ばれる場所周辺に広がる平坦地群が、平安時代後半頃にはじまる中世寺院の僧房や堂塔跡である可能性が強く、現在の『極楽寺』の前身にあたる山林寺

院が存在していたものと思われる。阿弥陀堂、八幡宮については、明治期まで当地にあり、明治 39~40 年に現在の極楽寺、五社神社にそれぞれ合祀されており、T-6 で検出された近世期の石敷遺構は、そこに至る参道にあたると思われるが、近世期の遺物の散布は少なく、A 地区周辺の活動の盛期は中世期にあると考えられる。

一方、B 地区では、中世期にさかのぼる遺物は出土しておらず、近世期のみの活動痕跡が残されている。T-9~13 周辺は、現状においても、地表面に近世期の墓石が転がっているなど、墓地として使用されていた場所であることがうかがえる。T-11・12・13 においても、18 世紀～ 19 世紀の甕棺や副葬品が出土した。これらの墓は、現在は他所に移転して祀られている。

墓地跡の西側には、旧極楽寺跡とされる、平坦地が位置しており、庭園跡などの遺構が現在でも確認される。周辺には、18 世紀～ 19 世紀を中心とする多量の陶磁器や瓦が散布しており、中世期にはじまる寺院活動の中心が、近世期には A 地区から B 地区に移ったものと思われる。

極楽寺縁起によると、極楽寺はもとは森内谷にあって、白雉年間（650~654）法道仙人によって開らかれたと伝えられる。伝承では、その後、荒廃期をはさんで、延徳年間（1489~1492）に、笛草城（森内山山上）の城主谷桐越中守六朗基国（詳細不明）により菩提寺として再建されたが、戦国末期の落城とともに兵火により焼失したとされている。

延宝５年（1677）の検地帳には、「極楽寺」の記載はなく、２間×２間の『阿弥陀堂』が除地として記されているのみであるが、1671 年の寺文書『往来一札之事』には「極楽寺」が発行元となっているため、縁起にみられる戦国末期の被災後も寺自体は存続していたと思われる。

元禄年間（1688~1704）には丹波の僧、盛維上人によって中興されるが、再び火災に遭い、安政２年（1855）に再建、さらに大正 11 年にも火災で焼失し、現在の姿に再建されたと伝えられている。なお、B 地区の旧極楽寺跡から現在の地へ移ったのは、寺伝によると明治末期とされている。

今回の調査成果を、こうした寺伝に照らし合わせてみよう。

阿弥陀堂屋敷周辺の A 地区の出土遺物から考えると、その創建期と考えられる平安時代後半（10 世紀後半～ 11 世紀）をはじまりとし、『荒廃期→谷桐越中守六朗基国の再建→兵火により焼失』を伝える戦国期頃までの活動の痕跡が伺える。一方、元禄年間（1688~1704）の、盛維上人による中興から、安政２年（1855）の再興、明治末期の移転までの期間の遺構や遺物が B 地区で確認され、基本的には縁起に合致した遺跡の変遷が確認される。

すなわち、その草創期から、森内谷山中で、中世期 A 地区から近世期 B 地区と、時代によって場所を変え、荒廃と再建を繰り返しながら存続し、明治末期に現在の場所に移転されるまでの痕跡が確認される。

今回は、各地区のトレンチ調査のみで、遺構に影響する部分については、工事計画が変更され、現状保存されることとなったため、各地区の具体的な遺構のあり方までは不明であるが、中世期の山林寺院から近世寺院への転身、変化を示す重要な遺跡として、今後も注目していかなければならない。

T-4

T-7

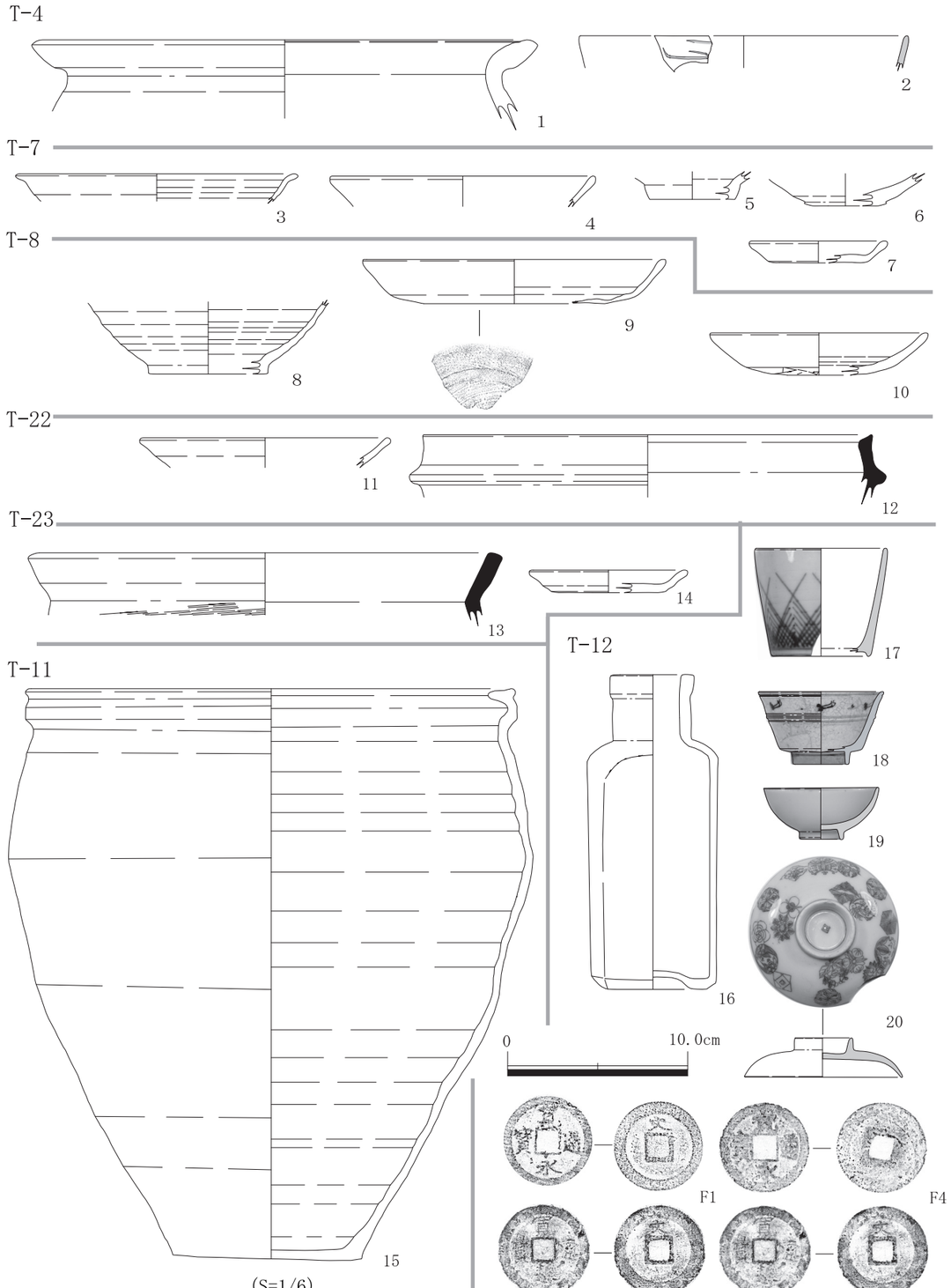
T-8

T-22

T-23

T-11

T-12

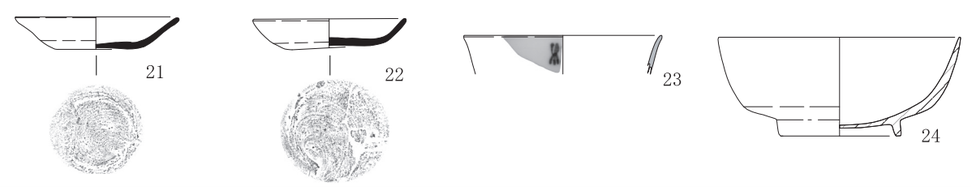


(S=1/6)

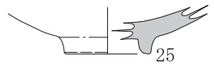
(S=2/3)

第33図　出土遺物(1)

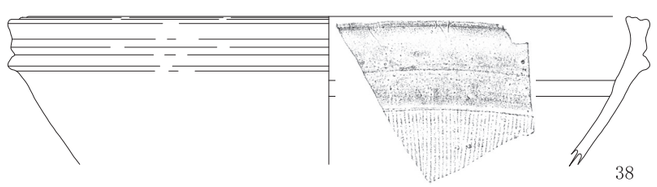
T-13

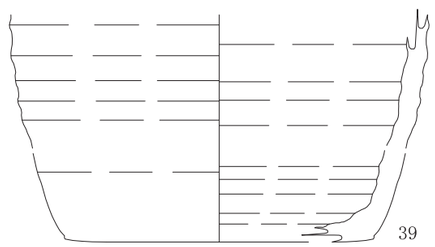


阿弥陀堂付近表採

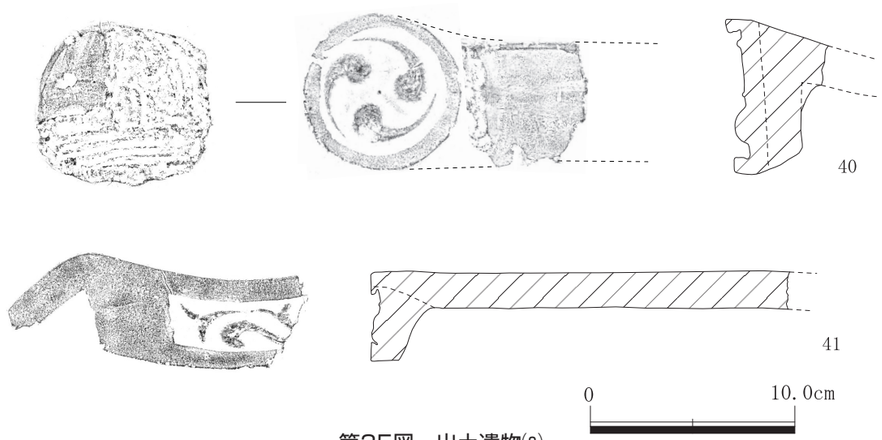


近世極楽寺跡表採





第34図　出土遺物(2)



第35図　出土遺物(3)

表３　豊部・森内谷遺跡遺物観察表

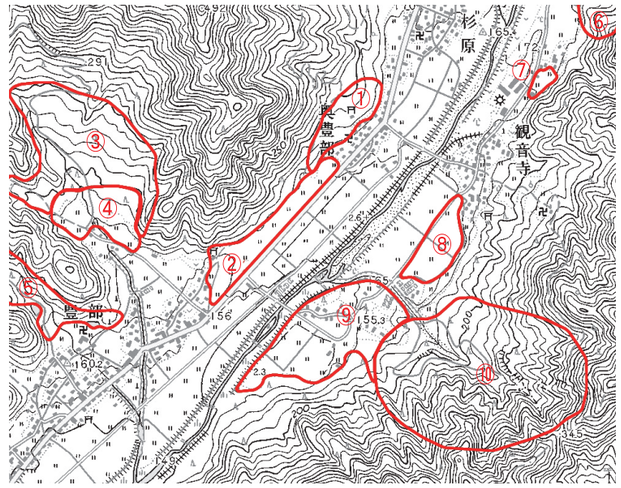
・法量の単位はcm

番号	出土場所	種類	器種	口径	底径	高さ	調整等　内面	調整等　外面	実測No.
1	T-4	丹波焼	甕	26.6	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	035
2	T-4	青磁	碗	18.1	－	－		雷文	036
3	T-7	須恵器	碗	15.4	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	029
4	T-7	須恵器	山茶碗	14.1	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	028
5	T-7	須恵器	山茶碗	－	4.8	－	ヨコナデ	ヨコナデ　底部回転糸切	030
6	T-7	須恵器	山茶碗	－	4.6	－	ヨコナデ	ヨコナデ　底部回転糸切	031
7	T-7	須恵器	小皿	7.4	5.5	1.2	ヨコナデ	ヨコナデ　底部回転糸切	027
8	T-8	須恵器	山茶碗	－	6.5	－	ヨコナデ	ヨコナデ　底部回転糸切	033
9	T-8	須恵器	山茶碗	16.7	10.1	2.5	ヨコナデ	ヨコナデ　底部回転糸切 底部外周ヘラケズリ	032
10	T-8	須恵器	山茶碗	11.8	7.9	2.3	ヨコナデ	ヨコナデ　底部回転糸切 底部外周ヘラケズリ	034
11	T-22	須恵器	山茶碗	13.6	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	023
12	T-22	土師器	土鍋	24.9	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ　鍔部ヌス付着	024
13	T-23	土師器	土鍋	25.2	－	－	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部平行タタキ	025
14	T-23	須恵器	小皿	8.5	7.0	1.2	ヨコナデ	ヨコナデ　底部回転糸切	026
15	T-11	丹波焼	甕	54.0	21.0	63.3	ナデ	口縁部ヨコナデ 体部平行タタキ	038
16	T-12　SX2	－	ガラス瓶	4.6	5.6	17.5			001
17	T-12	磁器	そば猪口	7.2	5.4	6.0		櫛垣文	004
18	T-12	磁器	小杯	6.8	4.9	4.0	淡オリーブ釉	淡オリーブ釉　口縁部鎬文	005
19	T-12	磁器	小杯	7.5	2.3	2.9	無文	無文　畳付露胎	003
20	T-12	磁器	蓋	9.8	3.1	2.2	口縁部圏線	底部『旭』 畳付露胎	002
21	T-13	土師器	小皿	7.9	3.8	1.6	ヨコナデ　透明釉	ヨコナデ　底部回転糸切	006
22	T-13	土師器	小皿	7.5	3.8	1.4	ヨコナデ　口縁部ヌス付着	ヨコナデ　底部回転糸切 口縁部ヌス付着	007
23	T-13	磁器	碗	9.6	－	－		輪宝文	008
24	T-13　SX1	漆器	椀	11.8	5.9	4.8			039
25	阿弥陀堂付近表採	青磁	碗	－	4.1	－		畳付～高台内面露胎	037
26	近世極楽寺跡表採	磁器	碗	9.6	3.5	5.1		体部草花文　底部印文 畳付露胎	011
27	近世極楽寺跡表採	磁器	碗	－	5.3	－	界線　底部草花文	体部草花文　畳付露胎	012
28	近世極楽寺跡表採	磁器	碗	－	4.1	－	底部界線 コンニャク印板による五花弁文	草花文	014
29	近世極楽寺跡表採	磁器	広東碗	12.6	6.4	6.4	界線　底部コンニャク印判	梅もしくは松文	009
30	近世極楽寺跡表採	磁器	碗	6.8	3.6	5.5	体部界線　底部五弁花文	体部七宝繋文　界線 腰部退化した雲龍文 高台界線　畳付端部露胎	013
31	近世極楽寺跡表採	磁器	そば猪口	8.7	6.9	6.2		体部草花文　界線 口縁端部鉄釉	010
32	近世極楽寺跡表採	磁器	小杯	8.4	3.5	3.5		雁音文	015
33	近世極楽寺跡表採	磁器	小碗	8.8	3.0	3.5	底部型紙摺による文	口縁部～体部界線 型紙摺による草花文　畳付露胎	019
34	近世極楽寺跡表採	磁器	小杯	5.8	2.9	4.4	口縁部雷文	体部界線　草花文 高台部波文　界線　畳付露胎	017
35	近世極楽寺跡表採	磁器	小杯	6.3	2.5	2.6		畳付端部露胎	016
36	近世極楽寺跡表採	磁器	皿	11.1	6.2	1.8	口縁部雷文 体部～底部四角窓に草花文 界線　草花文	界線	018
37	近世極楽寺跡表採	丹波焼	甕	42.2	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	020
38	近世極楽寺跡表採	丹波焼	擂鉢	31.3	－	－	ヨコナデ　卸目10条1単位	ヨコナデ	021
39	近世極楽寺跡表採	丹波焼	－	－	15.1	－	ヨコナデ	ヨコナデ	022
40	近世極楽寺跡表採	瓦	軒瓦						040
41	近世極楽寺跡表採	瓦	軒平瓦						041

Ⅴ　奥豊部古墳群の調査

1．はじめに

奥豊部古墳群は、標高 651.3 mの森内山から南にのびる尾根の東側山裾に位置する、６世紀後半～７世紀中頃にかけて築かれたと考えられている古墳群で、地表面観察では、12 基の古墳が確認されている。平成９年度には、作業道敷設工事に伴い、１号墳の発掘調査が行われ、長軸 12.4 m、短軸 10.4 m の楕円形を呈する円墳が検出された。埋葬施設は、全長 9.4 m、幅 1.5~1.85 m の無袖式の横穴式石室で、石室内部からは６世紀末～７世紀中頃と考えられる多量の須恵器と共に、２組以上の馬具や 28 点以上の鉄鏃等の鉄器など、多量の副葬品が出土した。また、墳丘内からは、石室を 1~3 重にとりまく外護列石も検出された。この１号墳周辺には、地上観察では、西側上方に２号墳、東側下方に３・４号墳が隣接して位置しており、ひとつのまとまりを形成している。１号墳以外は現状保存されている。



第36図　周辺の遺跡分布図

①奥豊部古墳群　②五社神社前遺跡　③豊部・森内谷遺跡　④豊部・森内遺跡
⑤柏谷鉱山跡遺跡　⑥箸荷・戈田地区散布地　⑦箸荷・戈田遺跡　⑧観音寺遺跡
⑨郷領・吹屋場地区散布地　⑩樺坂鉱山跡遺跡

周辺地域の遺跡の分布としては、縄文時代後期～中世期に続く豊部・井杉遺跡、豊部・森内遺跡が山裾の扇状地に位置するほか、杉原川を挟んで東西の山中や山裾部に遺跡が多く位置しており、山中には近世～近代期の鉱山跡が多く広がる。

今回、当該地において、奥豊部地区墓地の周辺環境整備事業が計画されるにあたり、古墳を避けるかたちで事業計画をすすめるため、２号～３号墳の古墳の有無、広がりの確認のため、確認調査を行った。

【発掘調査期間】

2012 年５月 25 日～６月６日

【調 査 体 制】

発掘・整理調査ともに、文化庁の国宝重要文化財等保存整備費補助事業の採択を受け、多可町教育委員会が主体となり実施した。

《発掘・整理作業》　発掘・整理担当　安平勝利
補　　助　　員　松田優子、安平千恵美
整 理 技 術 員　早崎喜代美

《発掘・整理作業従事者》
小西繁利　久保正史　竹内弘司　森野恵三郎　吉田衣里

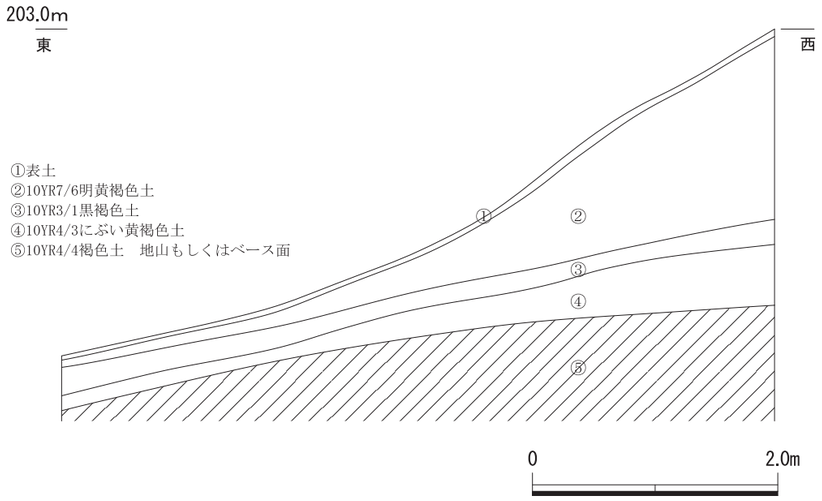
《調査・整理作業協力者、協力機関》
兵庫県教育委員会文化財室　奥豊部地区　公益社団法人西脇・多可シルバー人材センター

2．調査の概要

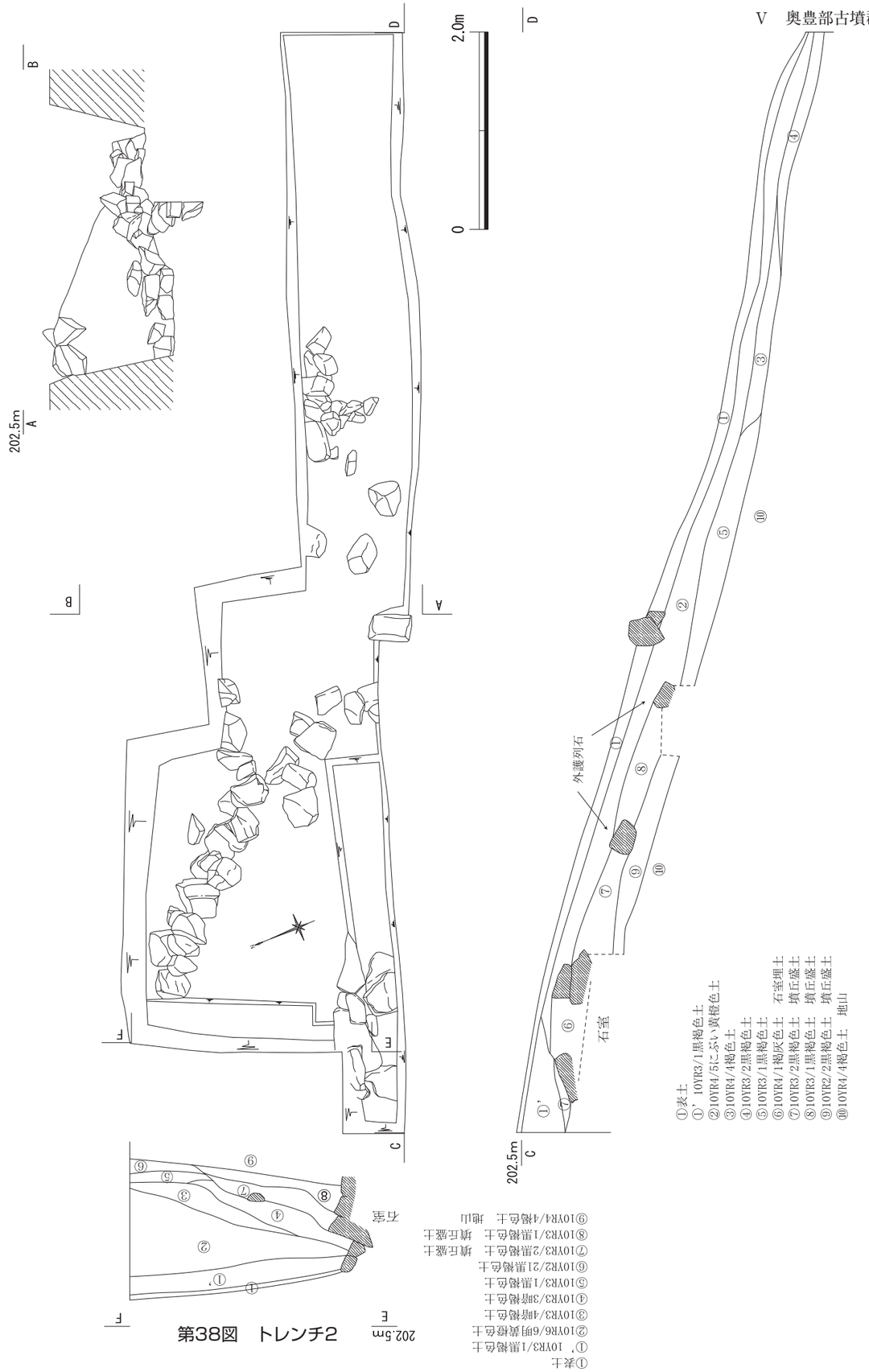
墓地整備工事計画地内には、地上観察で確認される２号～４号墳が位置しており、各古墳にトレンチを設定して調査を行った（図版 31）。

〈トレンチ１・・・奥豊部３号墳〉

地表面観察で３号墳と認識されていた高まりは、全面調査が行われた１号墳の東側下方に隣接して位置する。遺構、遺物は確認されず、トレンチの土層観察の結果、調査前に確認されていた



第37図　トレンチ１



第38図　トレンチ２

墳丘状の高まりは、当該地の北側に開かれている、奥豊部地区の現在の墓地造成時の排土によると思われる盛土であることが判明した。したがって、３号墳は古墳ではないことを確認した。

〈トレンチ２・・・奥豊部４号墳〉

地表観察では、僅かに墳丘状の高まりが確認される程度であった４号墳に設置したトレンチ。

調査の結果、墳丘は、トレンチ１でみられた後世の盛土によって、埋没した状態にあり、墳丘裾部は地表面から約 1.1 m下層での検出となった。

墳丘は、円墳の約 1/5 程度を検出した。墳丘裾部には径 35cm 前後の自然石を使った外護列石が、1~2 段積み、40cm 程度の高さにランダムに積み上げられている。特に外側に面をそろえる意識はみられないことから、当初は埋め込まれていたものと思われるが、検出段階では上部の墳丘埋土が流出した状態であった。墳丘の復元規模は約８mをはかる。

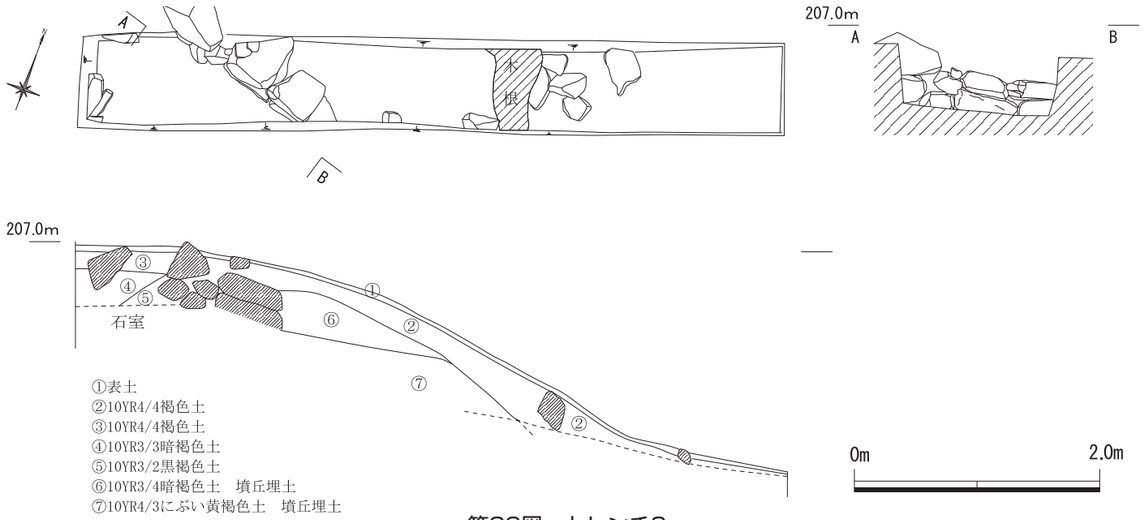
トレンチには、墳丘頂部がわずかにかかっており、石室の奥壁部のみを検出した。天上石は失われている。調査の性格上、石室内部の掘削は行わなかったが検出部分での石室幅は約 60cm をはかり、南もしくは南東方向に主軸を持つ。

石室及び墳丘埋土からの遺物は出土していないが、２号墳から流出したと思われる須恵器甕胴部片がトレンチ埋土から出土している。

〈トレンチ３・・・奥豊部２号墳〉

２号墳は、全面調査が行われた１号墳の西側上方部に位置する円墳。地表面観察の段階でも墳丘が認識できる状態にあったが、墳丘盛土はかなり流出しており、横穴式石室側壁の一部が地表面で確認できる状態であった。トレンチは墳丘北東半部を縦断するかたちで設定した。

墳頂部付近において、石室北側壁を検出した。石室床面までの掘削は行わなかったが、検出側



第39図　トレンチ3

壁の２石分を掘り下げ、石積みを確認した。横幅 50cm ×高さ 20cm 前後の横長の平たい自然石を使用して積み上げられており、南東方向に主軸を持つ。

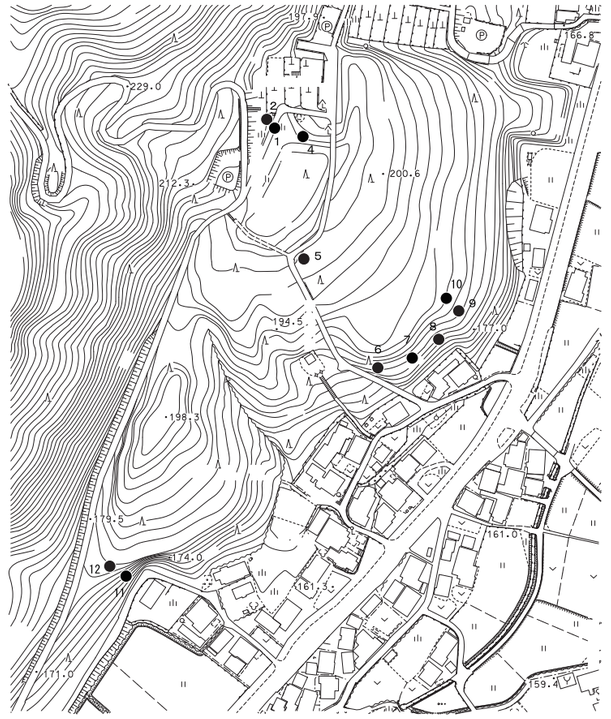
墳丘裾部では、外護列石の崩壊によると思われる、30~40cm 前後の自然石が多くみられたが、原位置を保つものは確認できなかった。また、遺物は検出されていないが、平成９年度の調査時に、１号墳の墳丘西北側で出土した須恵器は、この２号墳から流出したものである可能性が高い。

（加美町文化財報告３『奥豊部１号墳』遺物番号 77 ～ 81、150）

３．小　結

今回の調査により、地上観察によって古墳と推定されていた奥豊部２号墳～４号墳のうち、３号墳については後世盛土によるものであり、古墳ではないことが判明したが、２号、４号については横穴式石室をもつ円墳であることが確認された。

墳丘の推定復元規模は、２号墳が径約 7.5 m、４号墳が径約８mとなり、長軸約 12.4 m、短軸約 10.4 mをはかる１号墳に比べると、ひとまわり小型の円墳であるが、いずれも墳丘周囲に外護列石を巡らせる。石室主軸については、２号墳と１号墳が南東方向で同じくするのに対し、４号墳はより南向きの主軸を持つ可能性が強く方向を異にする。



第40図　奥豊部古墳群分布図

今回の調査では、トレンチ２埋土より、須恵器甕の小片が数点出土したのみで、図化できる出土遺物は得られず、明確な時期を示すことはできなかった。それぞれの古墳の位置関係でみると、緩傾斜地形の上方から、２号墳→１号墳→４号墳の順番に築造された可能性が推定できるが、全面調査が行われた１号墳が６世紀後半～７世紀前半であることから、大きく時期を異にするものではなく、いずれも古墳時代終末期に造営されたものと考えられる。奥豊部古墳群は、地上観察では 12 基の古墳が確認されており、その分布から、3~4 グループに分類できるが、今回調査を行った２~ ４号墳は位置的には、古墳群が位置する緩傾斜面の最上部に位置するグループであり、古

墳群形成の契機となったグループであると考えられる。

古墳時代終末期は、町内では当地域の盟主墳とされる東山古墳群が形成される時期であり、ほぼ同時期に造営がはじまる奥豊部古墳群は、東山古墳群を造営した集団の下位に位置し、地域支配の末端階層にあたる一集団の古墳群であると考えらる。したがって、奥豊部古墳群の様相は、当地域支配の階層性を具体的に表す古墳群として重要である。

今回の調査で得られた成果は断片的なものであるが、奥豊部古墳群の１グループ中にみられた共通性と差異は、今後、当地域の集団体制を考える上で具体的な資料になるものと思われる。



第41図　奥豊部1号墳（平成9年度調査）

図版

図版1　奥中・三内遺跡発掘調査(1)



調査前全景（三内地区）



T-2



T-3

図版2　奥中・三内遺跡発掘調査(2)



T-28 全景



T-28 掘立柱建物1

図版3　奥中・三内遺跡発掘調査(3)



T-9



T-10



T-16

図版4　奥中・三内遺跡発掘調査(4)



T-18



T-26



T-27

図版5　奥中・三内遺跡出土遺物(1)



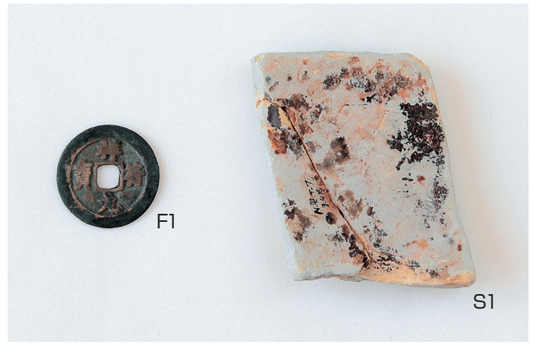
3



13

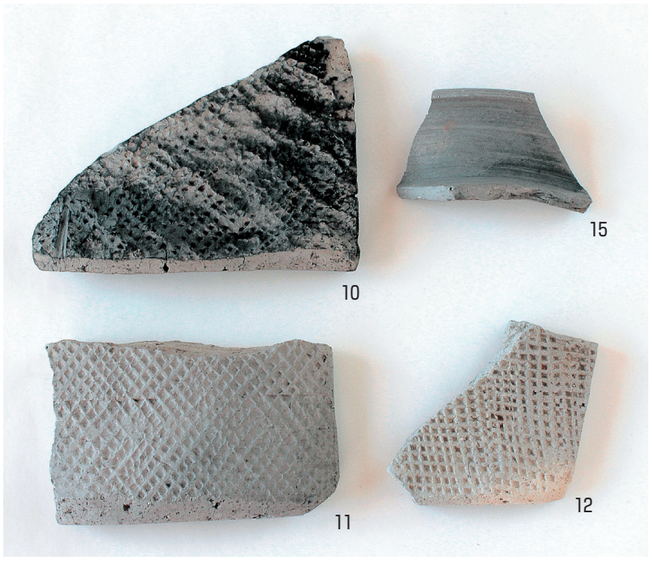


7



F1

S1

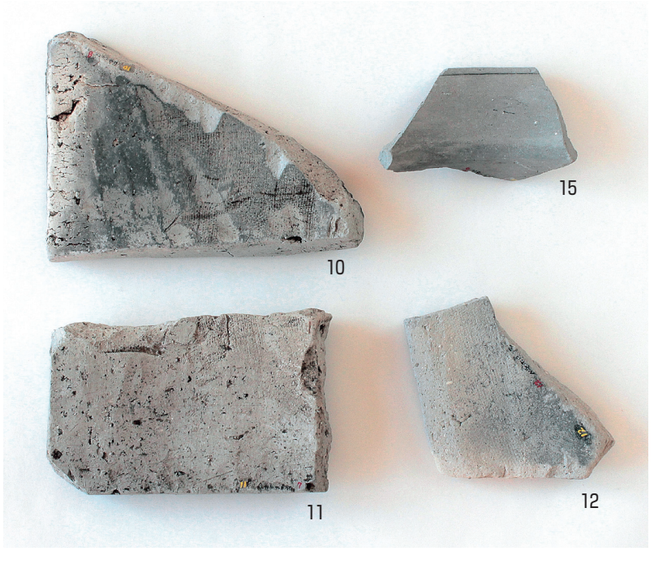


10

15

11

12



10

15

11

12

図版6　奥中・三内遺跡出土遺物(2)





図版7　極楽寺遺跡発掘調査(1)







図版8　極楽寺遺跡発掘調査(2)





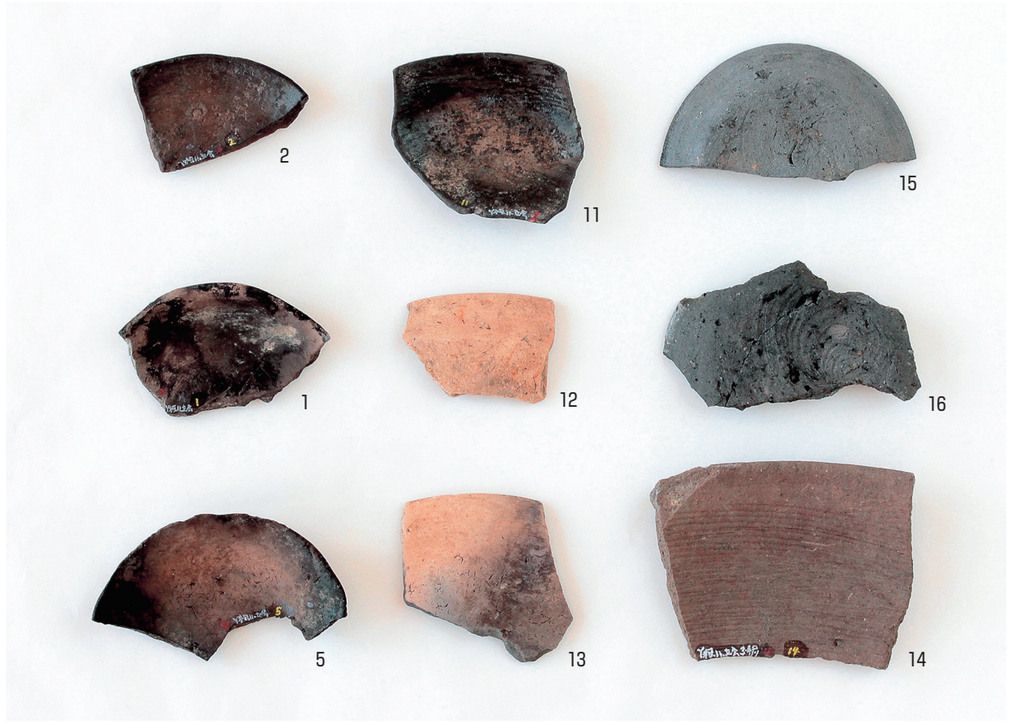


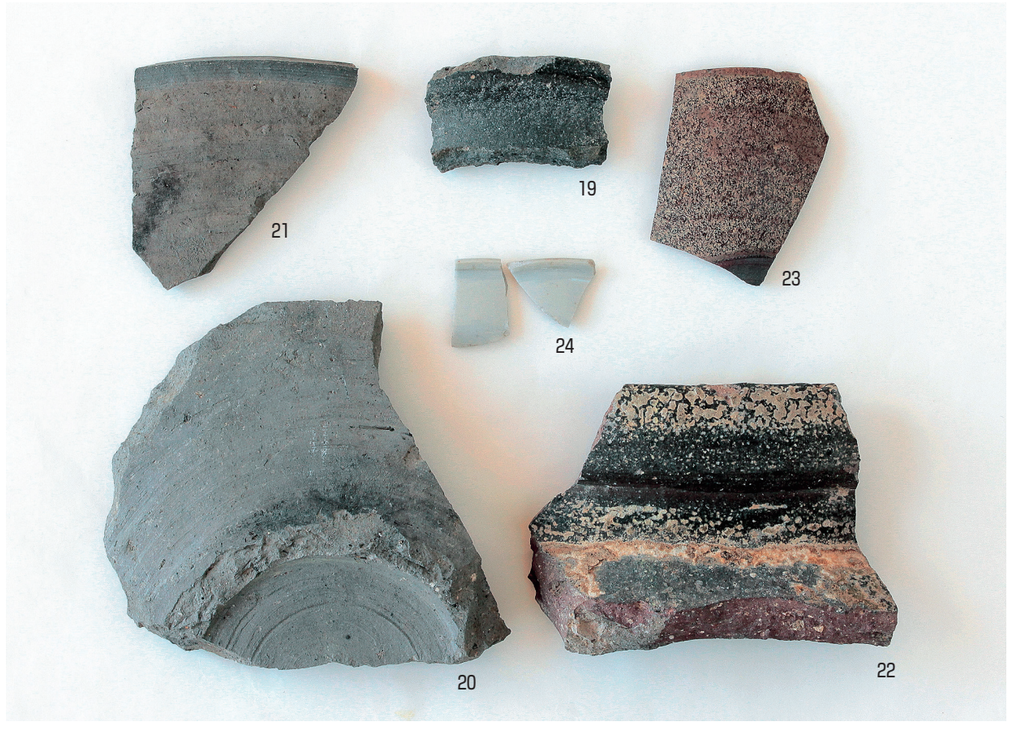
図版9　極楽寺遺跡出土遺物(1)











図版10　極楽寺遺跡出土遺物(2)




26
(S≒1:3)


28
(S≒1:3)

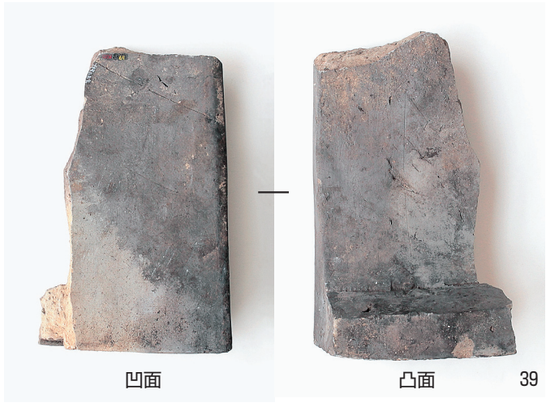

32
(S≒1:3)


33
(S≒1:3)

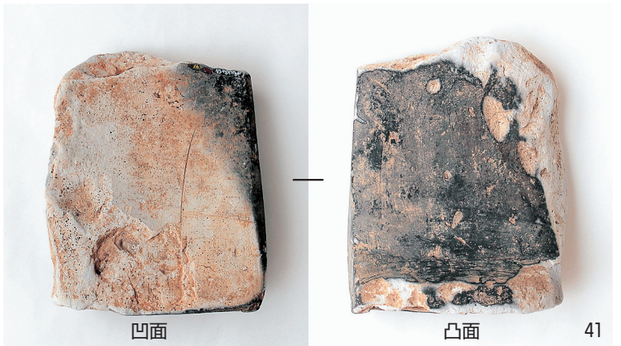

30
(S≒1:3)

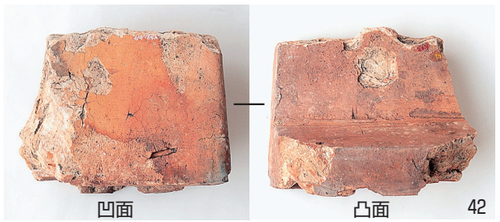


図版11　極楽寺遺跡出土遺物(3)


凹面
凸面
39


凹面
凸面
40


凹面
凸面
41


凹面
凸面
42


39
(S≒1:3)


40
(S≒1:3)


41
(S≒1:3)

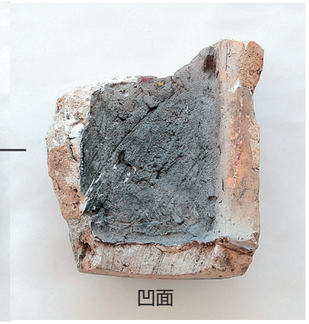

42
(S≒1:3)


43
(S≒1:3)


44
(S≒1:3)

図版12　極楽寺遺跡出土遺物(4)


凸面


凹面

34





46
(S≒1:3)



45
(S≒1:3)



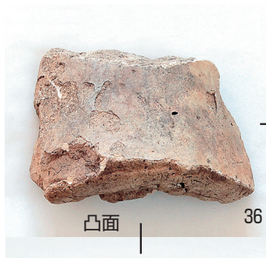
47
(S≒1:3)



48
(S≒1:3)



49
(S≒1:3)


凸面

36


凹面




凹面



75
(S≒1:3)


凸面



54





53





56



図版13　極楽寺遺跡出土遺物(5)



50



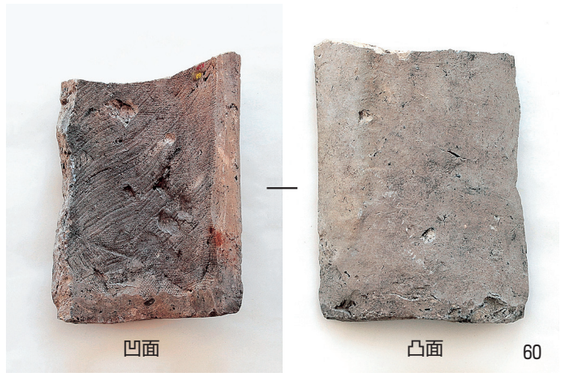
51

図版14　極楽寺遺跡出土遺物(6)


52


57


59 凹面


凹面

凸面

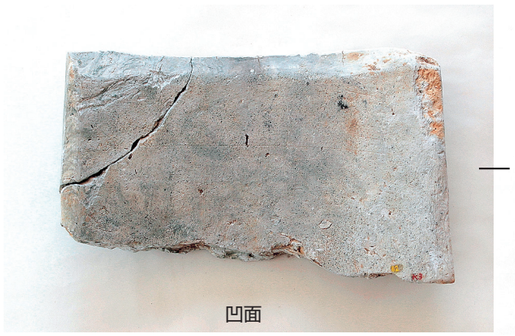
60


凹面


凸面

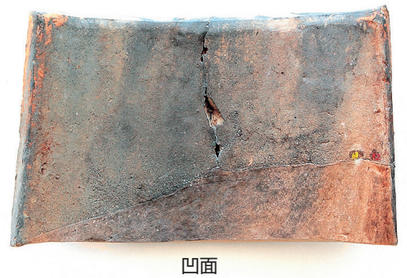
61

図版15　極楽寺遺跡出土遺物(7)


凹面


凸面

62


凹面


凸面

63


凹面


凸面

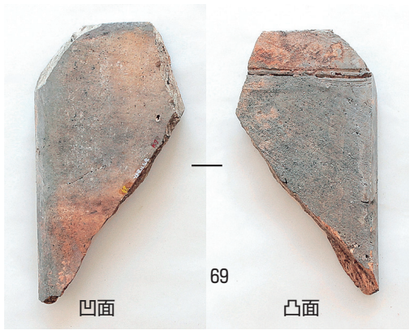
64

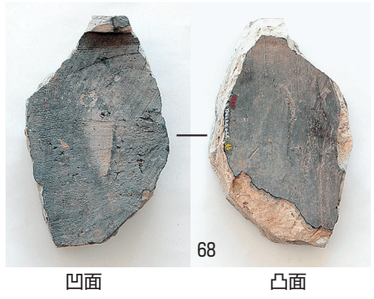

凹面

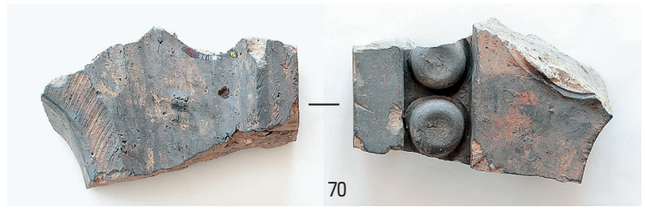

凸面

65

図版16　極楽寺遺跡出土遺物(8)

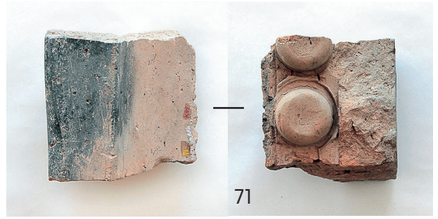


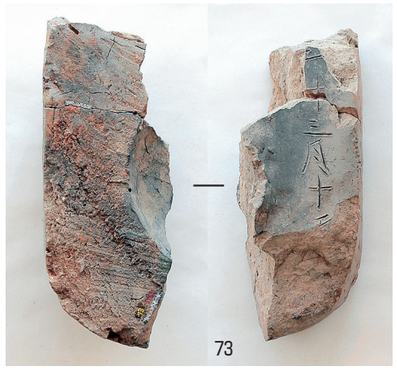








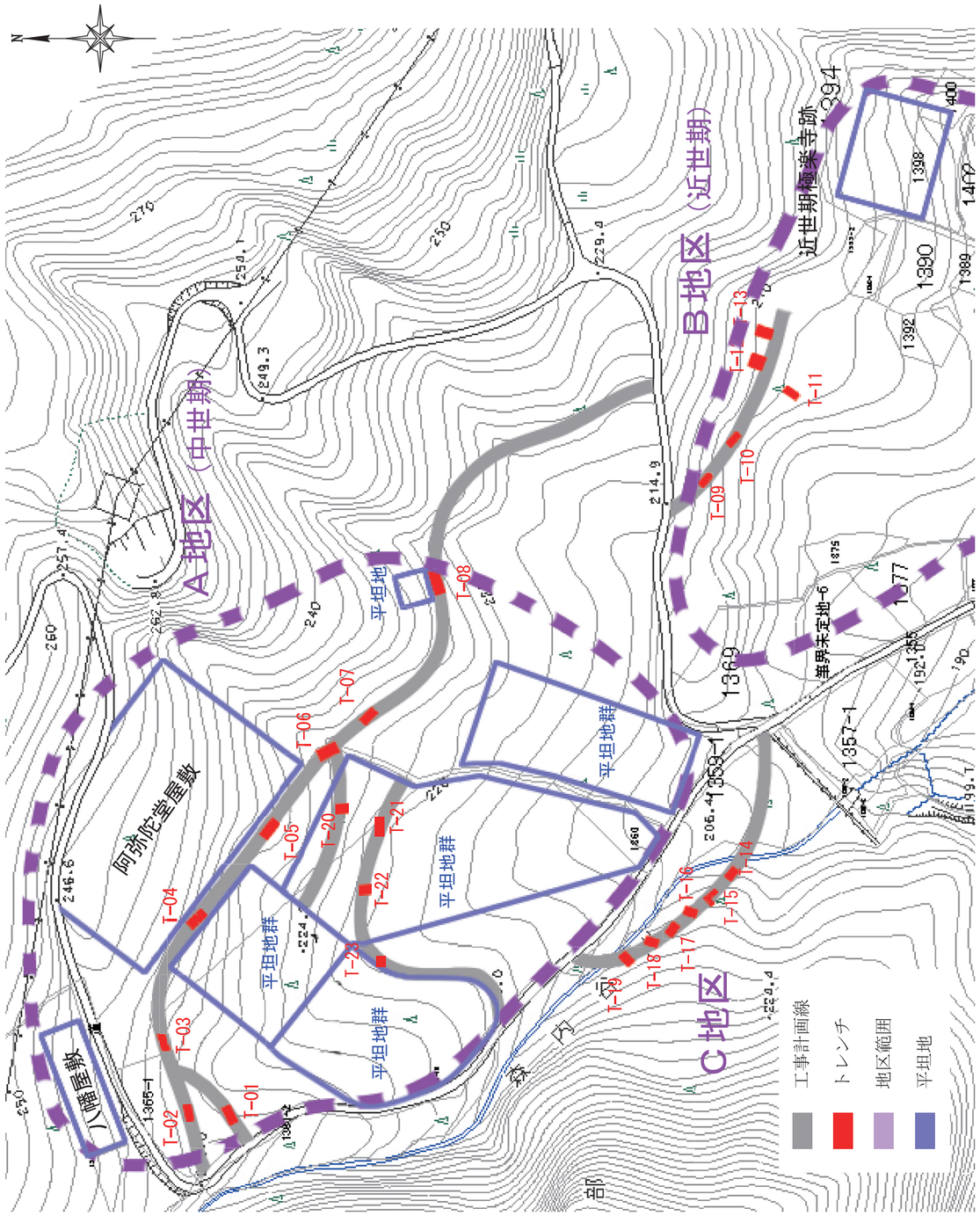






73 拡大（S≒1:2）

図版17　豊部・森内谷遺跡トレンチ位置図



図版18　豊部・森内谷遺跡調査地景



調査航空写真


調査地景（T-6付近）


調査地景（T-21付近）


調査地景（T-12付近）



調査地景（八幡屋敷付近）

図版19　豊部・森内谷遺跡T-1～T-4

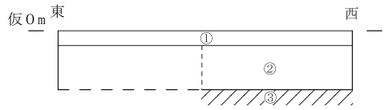

T-1


T-2


T-3


T-4

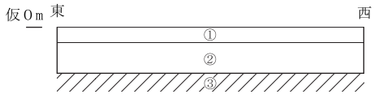
【T-1土層略図】



①表土
②にぶい黄橙色土
③黄橙色土（地山）



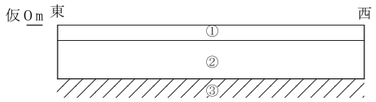
【T-2 土層略図】



①表土
②にぶい黄橙色土
③黄橙色土（地山）



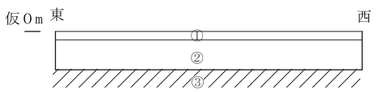
【T-3 土層略図】



①表土
②にぶい黄橙色土
③黄橙色土（地山）



【T-4 土層略図】



①表土
②灰褐色土
③黄橙色土（地山）

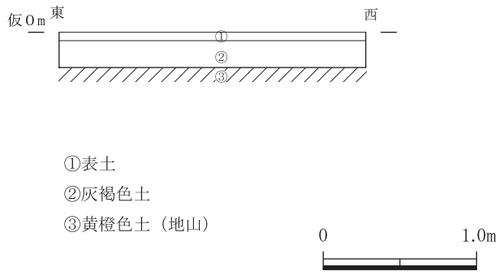


図版20　豊部・森内谷遺跡T-5・T-6



T-5

【T-5 土層略図】





T-6　調査前

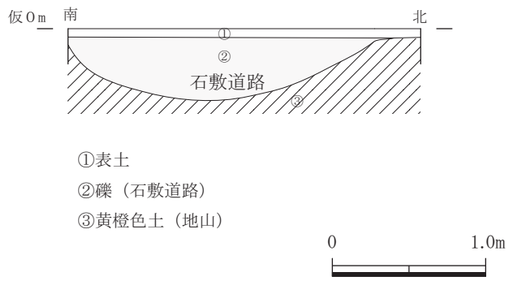


T-6　全景（東から）



T-6　全景（西から）

【T-6 土層略図】







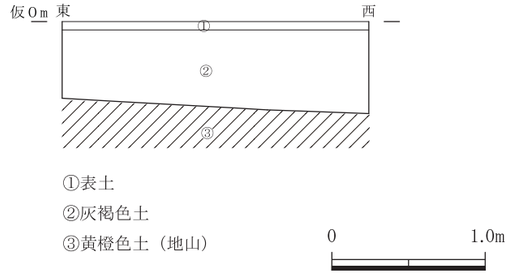
T-6　宝篋印塔
高さ：47.0cm
（上部高さ：9.5cm）
幅　：37.5cm

図版21　豊部・森内谷遺跡T-7・T-8



T-7

【T-7 土層略図】





T-8　調査前



T-8　全景



T-8　全景

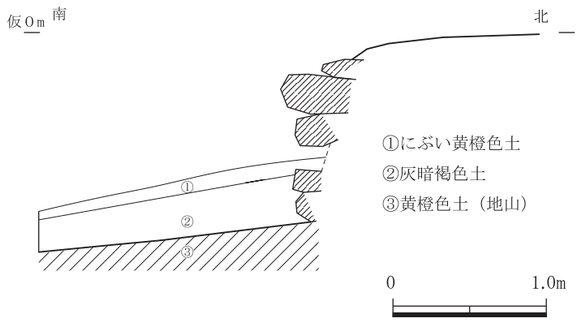


T-8　石垣細部



T-8　遺物出土状況

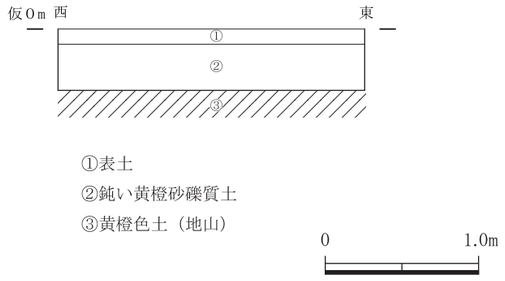
【T-8 土層略図】





T-9

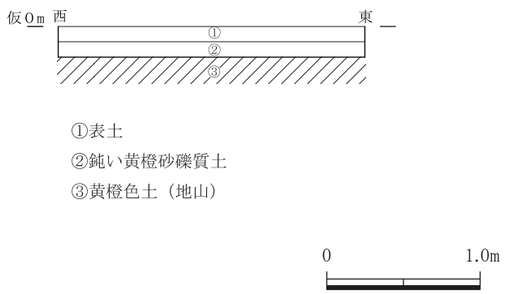
【T-9 土層略図】





T-10

【T-10土層略図】





T-11　調査前





T-11　遺物出土状況



T-11　全景



T-12



T-12　ＳＸ１・２



T-12　ＳＸ１

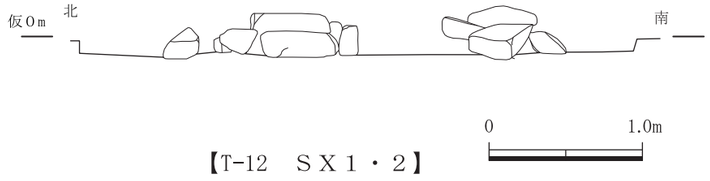


T-12　ＳＸ２



T-12　ＳＸ２六道銭出土状況





【T-12　ＳＸ１・２】

図版24　豊部・森内谷遺跡T-13


T-13　ＳＸ1　集石


T-13　ＳＸ1　集石除去　墓坑検出


T-13　全景


T-13　ＳＸ１


T-13　ＳＸ１　甕棺除去後


T-13　ＳＸ１　甕棺内遺物出土状況




T-13　ＳＸ１　甕棺



図版25　豊部・森内谷遺跡T-14～T-17

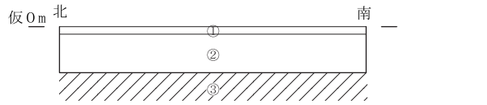

T-14


T-15


T-16


T-17

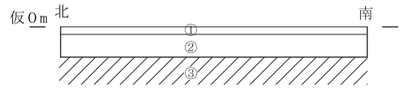
【T-14土層略図】



①表土
②にぶい黄橙砂礫土
③黄橙色砂礫土

0　1.0m

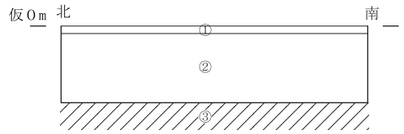
【T-15土層略図】



①表土
②にぶい黄橙砂礫土
③黄橙色土（地山）

0　1.0m

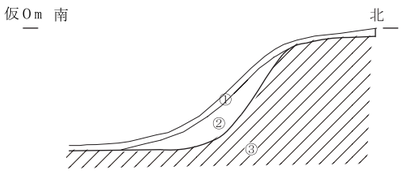
【T-16土層略図】



①表土
②にぶい黄橙砂礫土
③黄橙色土（地山）

0　1.0m

【T-17土層略図】



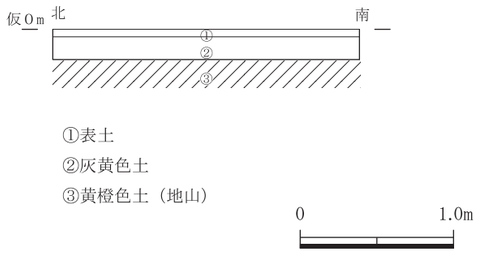
①表土
②にぶい黄橙砂礫土
③黄橙色土（地山）

0　1.0m



T-18

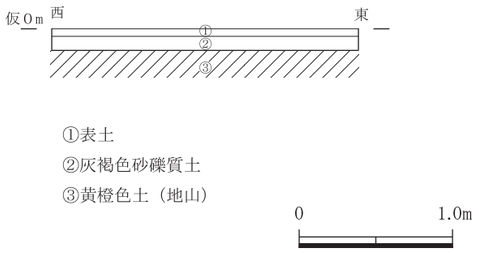
【T-18土層略図】





T-19

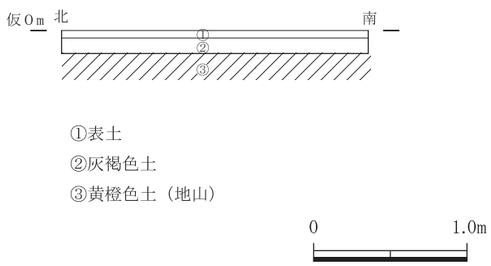
【T-19土層略図】





T-20

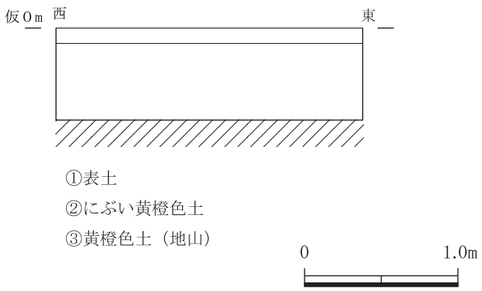
【T-20土層略図】





T-21

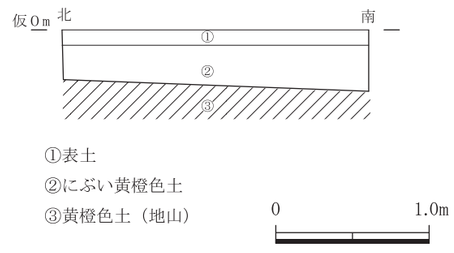
【T-21土層略図】





T-22

【T-22土層略図】





T-23

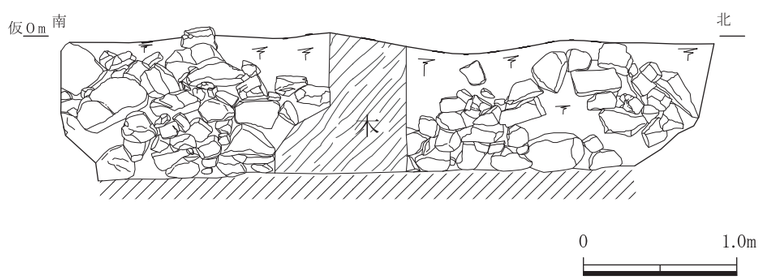


T-23　石垣



T-23　石垣

【T-23石垣】



図版28　豊部・森内谷遺跡出土遺物(1)



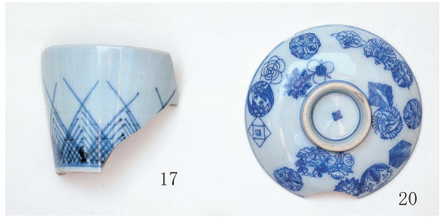

15


9細部（底部周辺ヘラケズリ）


10細部（底部周辺ヘラケズリ）


16

図版29　豊部・森内谷遺跡出土遺物(2)


17

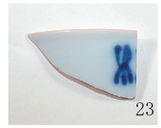
20


19

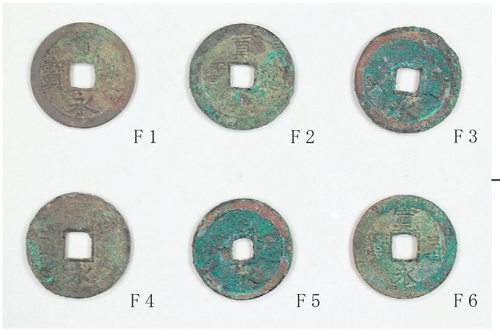

18

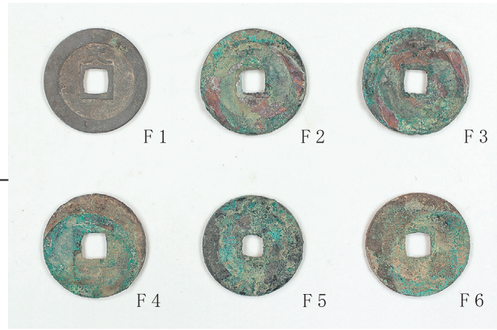

21


22


23


24







図版30　豊部・森内谷遺跡出土遺物(3)









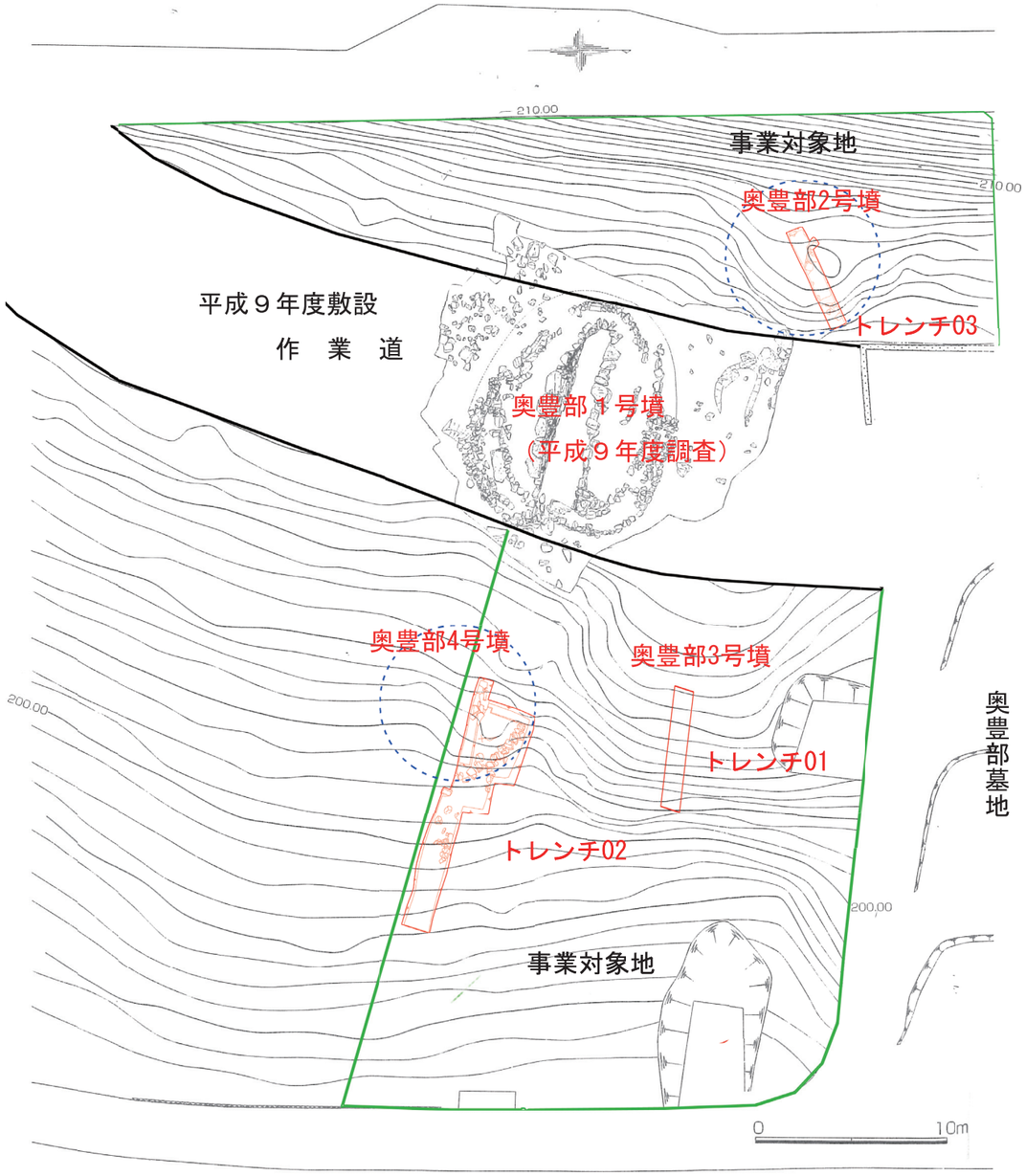








図版31　奥豊部古墳群調査位置図



図版32　トレンチ1（奥豊部3号墳）



3 号墳全景


トレンチ 1 全景


トレンチ 1 土層

図版33　トレンチ2（奥豊部4号墳）



4 号墳全景


トレンチ 2 全景


トレンチ 2　4 号墳墳丘（東から）


トレンチ 2　4 号墳墳丘（北から）

図版34　トレンチ2（奥豊部4号墳）



トレンチ2　4号墳墳丘（西から）



トレンチ2　4号墳石室



トレンチ2　4号墳列石①



トレンチ2　4号墳列石②

図版35　トレンチ2（奥豊部4号墳）



トレンチ2土層①



トレンチ2土層②



トレンチ2土層③

図版36　トレンチ3（奥豊部2号墳）



2号墳全景


トレンチ3全景


トレンチ3　2号墳石室

図版37　トレンチ3（奥豊部2号墳）


トレンチ3　2号墳石室北側壁


トレンチ3　土層①


トレンチ3　土層②

報 告 書 抄 録

ふりがな	おくなか　みうちいせき　ごくらくじいせき　とよべ　もりうちだにいせき　おくとよべこふんぐん
書名	奥中・三内遺跡、極楽寺遺跡Ⅱ、豊部・森内谷遺跡、奥豊部古墳群
副書名	
シリーズ名	多可町文化財報告
シリーズ番号	22
発行機関	兵庫県多可郡多可町教育委員会
編著者名	宮原 文隆 、安平 勝利
編集機関	多可町教育委員会　那珂ふれあい館
所在地	〒679-1134　兵庫県多可郡多可町中区茂利20　　TEL0795-32-2384
発行年月日	西暦2014年（平成26）３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
おくなか　みうち 奥中・三内	ひょうごけんたかぐん 兵庫県多可郡 たかちょうなかく 多可町中区 おくなかあざみうち 奥中字三内	28365	260200	35°02′48″	134°55′14″	19880725～ 19880815	約390㎡	川西北地区土地改良総合整備事業に係る事前調査
ごくらくじ 極楽寺	やちよく 八千代区 なかのまあざもんがみ 中野間字門上		280016	35°00′20″	134°54′08″	20110406～ 20110409	約10㎡	本堂建設にかかる事前調査
とよべ　もりうちだに 豊部･森内谷	かみく 加美区 とよべあざもりうちだに 豊部字森内谷		270063	35°07′06″	134°54′11″	20110526～ 20110625	約140㎡	作業林道にかかる事前調査
おくとよべこふんぐん 奥豊部古墳群	かみく 加美区 おくとよべ 奥豊部地内		加美区 59	35°07′08″	134°54′58″	20120525～ 20120606	約30㎡	墓地整備にかかる事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
奥中・三内	集落跡	古墳時代～中世	柱穴群、溝等	土師器、須恵器等	
極楽寺	寺院跡	平安時代～近世		須恵器、土師器、瓦多数等	雷文状瓦当文を有する瓦群
豊部･森内谷	寺院跡	平安時代～近世	山林寺院	須恵器、陶磁器等	
奥豊部古墳群	古墳	古墳時代	後期古墳群		

多可町文化財報告22

奥中･三内遺跡
極楽寺遺跡Ⅱ
豊部･森内谷遺跡
奥豊部古墳群

２０１４年３月
発行　多可町教育委員会
編集　那珂ふれあい館
印刷　ウニスガ印刷株式会社

■データー　紙質　表紙　アートポスト　220kg
見返し　色上質 藤色 特厚口
本文　クリームキンマリ 57.5kg
カラー図版　アート 93.5kg
文字　モリサワ　14級
写真　スキャナー分解
製本　無線トジ





多可町中区奥中

奥中・三内遺跡（おくなか　みうちいせき）

多可町八千代区中野間

極楽寺遺跡Ⅱ（ごくらくじいせき）

多可町加美区豊部

豊部・森内谷遺跡（とよべ　もりうちだにいせき）

多可町加美区奥豊部

奥豊部古墳群（おくとよべこふんぐん）

兵庫県多可郡多可町教育委員会
2014年３月

多可町文化財報告22　奥中・三内遺跡　極楽寺遺跡Ⅱ　豊部・森内谷遺跡　奥豊部古墳群

多可町教育委員会